テレストリアル・カレイドスコープ

sasagani

１．エンカウンター

一．エンカウンター

七月十九日・火曜日・午後四時。

あたしは自分の部屋のドアを乱暴に開け、カバンを机の上に放り投げた。

着替えもせず、ティッシュを箱から引ったくるようにつまみ取る。

パタパタパタパタパタパタと手際よく小さく折りたたみ、ポイっと口に放り込んだ。

折りたたまれたティッシュを噛む。

ひたすら噛む。

腹を立てたり、苛(いら)立ったりしたときの習慣ーーいや、これはもう習性と言っていいだろう。

もむもむもむもむもむもむもむもむもむ。

治療中の虫歯が右奥にあるので、左の歯列で噛む。

もむもむもむもむもむもむもむもむ。

アゴをうまく使い、ティッシュを横に転がしながら噛む。

もむもむもむもむもむもむもむ。

長く引き延ばされたティッシュを、舌を使って半分に折り、また噛む。

もむもむもむもむもむもむ。

もむもむもむもーー。

「うえっ」

おもむろに軽い嘔吐感がこみ上げ、ティッシュを掌(てのひら)に吐き出した。

吐き出したそれは蓑虫(ミノムシ)のような形になっていて、あたしの歯形だらけで、あたしの唾液が染み込んでいるせいか、色は元の純白ではなくわずかに黄色味がかっているように見えた。

醜いーーと、思った。

本来の用途とは違う使い方をされて変形したティッシュだけでなく、本来とは違う使い方をしているあたし自身の姿を客観的に想像し、この上なく醜いと思った。

「ヤギか、あたしは」

などと自嘲気味に呟いてみるが、実際はヤギ以下である。ヤギならば噛み終わった後、きっちりと飲み下すのだから。

仕方がないじゃないか、癖(クセ)なんだから。

心の中で誰に対してのものか判らない言い訳をしつつ、それをゴミ箱に捨てると、制服から部屋着へとすばやく着替えた。

癖(クセ)というより、癖(ヘキ)と読むべきだろうか。

苛立ちはまだ収まらない。

ーーもう一度、したくなった。

「仕方ないじゃないか」

言い訳を口に出してみる。

今度はティッシュをたたまずに、そのままガサガサと口へ詰め込んだ。

折りたたんだものよりも表面積が大きいため、舌や口中の水分が一瞬で吸い取られーー。

「うえっ」

大して噛まない内に餌(え)づいてしまい、思わず掌に吐き出した。

それはまだ蓑虫になっていないし、もちろん歯形もついていなかったし、あたしの唾液が染み込んでいない部分も多かった。

それを見てざわつきかけた心に、あたしは静かにブロックをかけた。

この癖(ヘキ)はいつから始まったのだろうか。

記憶にはない。

いつの間にか習性になっていた。

あたしはまだ中学二年だからそんなに昔じゃないはずなのだけれども、はっきりと覚えてはいない。
家族では、母と弟があたしのこの癖(ヘキ)の事を知っている。
これを見た二人はまず、
「外でやるなよ」
という意味が含まれた言葉をかけてきた。
「はーちゃんは小学校に上がるまで指吸いしてたからねえ」
と、母は幼児期の口唇的欲求と結び付け、思い出話にすり替えた。
「気持ち悪いな。見せんなよ」
と、弟の稔(みのる)は侮蔑の視線を向けてきた。
二人とも、中学二年の女子がするような行為ではないと判断したのだ。
二人とも、家族という一見明瞭なようでこの上なく曖昧な集団の内だからこそ許容したのだ。
判断され、許容してもらう。
そんなあたしって、一体何なんだろう。
あたしはあたしなんじゃないのか。
世界にただ一人しかいない人間。
確立した一つの人格。
あたしは、あたし。
田島(たじま)葉摘(はつみ)だ。
――いや。
そうではないのかもしれない。
同じ集団の中にいる他者によって発見され、観察され、判断され、許容されて初めて存在する。
あたしはそんな相対的なモノなのかもしれない。
確固とした人格ではなく、他の存在に影響され、影響され、影響され尽くした果てに、原形も留めないほどに形を変えられた異形(いぎょう)なのかもしれない。
そんなのは――イヤだ。
絶対に認めたくない。
あたしは、誰が何と言おうと今ここにしっかりと絶対的に存在している唯一無二の人格――田島葉摘なのだ。
誰かに見つけられなくても、行動を観察されなくても、善し悪しを判断されなくても、存在する事を許されなくても、あたしはあたし、田島葉摘なのだ。
あたしは、あたしを相対的な存在で不純な人格と決めつける全ての人間とその価値基準を断固として拒否する。
絶対に認めない。
いいじゃないか、ティッシュを噛む癖(ヘキ)があったって。
あたしは在るがまま、在りたいように在るのだ。
したい事をしたいようにして在る。
在るがままに在る。
ひたすら在る。
――でも。
あたし以外の全ての人間が、人間の存在は相対的に位置づけられるという判断基準を持っていて、その基準を前提として人間の集団が形作られているのだとしたら、あたしはその人間集団の中にとても居られないだろう。
あたしが、唯一無二のあたしとして在ろうとしたら、人間集団には居られない。
という事はつまり――あたしの居場所はどこにもないのだ。
家だけではない。学校もそうだ。
家にも、学校にも、どこにも――。
あたしは、居てはいけないのではないか。
――そこで、はっと我に返った。
そうだ、学校だ。

あたしが腹を立てたそもそもの理由は、学校にあったのだった。
一週間前、一学期の期末考査の結果が返却された。その結果が引き起こしたある出来事により、あたしは非常に不快な気分になったのだ。
考査の結果で不快になったといっても、悪い点数を取ったのではない。むしろその逆で、ある教科だけ、たまたまのまぐれで満点を取ってしまった。
満点は学年であたしだけ――つまりこの教科に限れば、あたしが学年トップだという事になる。
あたしは毎日コツコツと勉強し、地力を積み重ねていく性分ではない。考査が近づくと、慌てて教科書とノートの中身を頭に詰めこむタイプである。
進学塾には通っていないし、通おうという気もさらさらない。
しいて言えば、読書が好きなせいか、国語だけはそこそこできた。
特徴のない無害な存在であるあたしが、一教科だけでも学年一位を取ってしまった事が発端なのだ。
話は少しずれるが、あたしはクラスに友達がいない。といっても、クラスで浮いているのでもいじめられているのでもない。同性のクラスメイトとなら挨拶くらいは普通にするし、他愛のない雑談もする。
考えてみると、クラス内に嫌いな人も仲の悪い人もいない。仲の良さを数値化してみたら、際立って高い人も低い人もいないだろう。
ただ、特別に仲の良い友達がいないのだ。作りたいと思った事もない。
我ながら、集団内でのバランス感覚だけは絶妙なレベルだと思う。しかし優れたバランス感覚も、一歩間違えば女集団の中で致命的なまでの孤立を招く事がある。
一定数以上の人間が集まれば、帰る方向が同じだとか、部活が同じだとか、何となく気が合うだとか色々な理由で幾つかの小集団が形成される
その小集団の在り方は、男と女で大きく異なってくる。防衛本能が強いせいか、巣作りの性質があるのかどうだか知らないが、女の小集団は排他的な面が強いのである。
もちろん、どの小集団のどの女子もあからさまな攻撃や差別はほとんどしない。それが意識的なのか無意識的なのかはわからないけど、とにかく他の小集団や自分の小集団に属していない者が目の前に居る時はごく普通に振る舞うのだ。
しかし他の小集団がいなくなり、身内だけの会話になると一変する。何気なく始まったはずの話が徐々にスライドし、他の小集団に対する悪口や中傷へと転じるのだ。
幸運にも、あたしはそういった集団の中にいた事はないが、一年生の最初の小集団が形成されきっていない時期に何度か、その会話を聞いた事ならある。
悪気のない悪口、もしくは無邪気な悪意。そんな名状しがたい感情がそこにあった。
あたしの事を言っていたのではなかったが、心がざわついて仕方がなかった。たまらなく不安な気持ちになった。
この人たちは、自分が言われる側に回った時の事を想像したりしないのだろうか。
それとも、言われても平気だから言っているのだろうか。
理解できなかった。
理解したくもなかった。
一人が気楽でいいや、とその時から強く思うようになった。
みんなと同じように、クラスの女子という大集団の中で、誰とでも均等に仲良くできれば悪くは言われないだろう。
その日以来、あたしのバランス感覚にいっそう磨きがかかった。
一年と少しは何とか無難に過ごしてきたが、それも今日までだった。
とうとう、無邪気な悪意があたしに向けられてしまったのだ。
均等に仲良くすればいい、というのは間違いだった。
大きな集団に居て、しかしどの小集団にも属していない女は一匹狼も同然――いや、そんな格好いいモノではない。イソップ寓話のコウモリ同様の存在なのだ。
今日、帰りのホームルームの後に本を借りようと図書室に行った。普段は一度に三冊しか借りられないのだけれど、夏休みは八冊まで借りられるため、向かう足取りは翼が生えたように軽かった。
図書室に入り、本の森を散策した。

文庫本を四冊取り、ちょっと専門的な歴史の本も借りようと書棚に目を這わせた時、聞き覚えのある声が棚の反対側から聞こえた。
クラスに上中下と三つある小集団の内、中ランクに位置する五人だった。
通知表の成績がどうのとか、携帯だとかネット掲示板だとか、そんなどうでもいいネタから、話題は唐突にあたしへと切り替わった。
「――そういえば田島って、クラスの誰とも仲良いよね」
「そうそう、うちも同感。なんつーの、アレ。八方美人ってやつ？」
こんな感じで始まった。
「田島ってさ、ビミョーなキャラじゃん？」
「言えてる。見た目は優等生っぽいのに成績はあんま良くないし」
「でも、こないだ満点取ってたよね」
「あーそうそう」
「自分のテストが良くなくても、田島もこのくらいだって言えばうちのママ納得してたんだよね」
「あんな点取るなんて、裏切りだよね」
おいおい。裏切るも何も、君らと何かの協定を結んだ覚えはないぞ、と心の中でツッコむ。けどまあ、それくらいの事なら言われているだろうと覚悟はしていた。
冷静でいるようで、その実、あたしはかなり動揺していた。
足音を立てないように気を遣い、静かにゆっくりと貸し出しカウンターに向かった。
文庫四冊とハードカバー二冊、そして学生証と貸し出し証を兼ねたカードを司書の先生に渡し、手続きをした。
何に動揺しているのか判らないまま、呆然と帰路に着いた。
家に近づくにつれて思考が明瞭となり、部屋に入るや否や溜まりに溜まった苛立ちが一気に噴出した、というわけだ。
ちなみに、あたしが満点を取った教科は社会科である。
説明するまでもないけど、中学の社会科には地理・歴史・公民の三分野があり、あたしが通う中学では一学で地理、二年で歴史、三年で地歴の残りと公民を学習する。つまり、二年生のあたしが腹を立てる原因となったのは歴史的分野だった。
歴史の期末考査の範囲は、奈良時代から室町時代までとそんなに広いわけではなく、普通に授業を受けていれば及第点はまず取れるというくらいの簡単な問題が出された。しかし、及第点は取れるといっても、クラスや学年で上位に入るには並の努力ではとても足りない。
暗記には七割の壁がある、という話をテレビの教育番組で観た事がある。たしか記憶の特集だ。暗記問題は七割までは比較的楽に覚えられるが、八割以上を取るのはそう簡単にいかないのだそうだ。科学的な検証も色々やっていたが、内容はほとんど覚えていない。記憶の番組だったのに、おかしな話だ。
実際、結構頑張って詰めこんだつもりだった中間考査の得点は七割弱だった。
そんなあたしが、期末で満点を取れた理由とは――。
と、何だかマンガ雑誌の広告に載っていそうなコピーみたいになってしまったが、さておきガリ勉の才女もどきや歴史マニア気取りの男子を抑え、あたしが社会科歴史的分野のタイトルを手にできたのはなぜかというと、これがまあよくある話なのである。
ぶっちゃけてしまうと歴史の教師を、まあその……好きになってしまったのだ。
その教師は相馬(そうま)一臣(かずおみ)という名前で、元々の歴史担当の教師が育児休暇を取ったため、一年間だけの代用教員としてあたしの通う中学に赴任して来た。二十五歳とまだ若く、長身で顔もそこそこなので女子の評価はなかなか高い。体格もがっしりしているのだが、本人が言うにはスポーツマンではないらしい。
肝心の授業はというと――普通である。
歴史的な事実を時間の経過に沿って板書し、それについて淡々と説明する。教師としてちゃんと授業をするのはあたしの中学が初めてらしく、緊張してしどろもどろになる事もよくある。
まあ、こんなもんだろう、という感じ。
これはあたしだけでなく、相馬先生の授業を受けた生徒の大半が抱く感想だと思う。

たかだか中学二年生の子どもが言うのもおかしいかもしれないが、大人のように余計な事を考えない子どもだからこその鋭い直感で見抜けるものも意外とあるのだ。
相馬先生の授業は、普通だった。
きわめて普通。
至って普通。
――しかし。
ある日、普通じゃなくなった。
五月の連休が終わってすぐの授業だった。中間考査が目前に迫っており、それに向けて生徒のやる気を起こさせようと思ったのか、相馬先生は授業が始まる前におかしな話をした。
それはタマムシという虫の話だった。
実物を見た事はなかったが、後で見た図鑑に載っていたタマムシは形容しがたい不可思議な色に光っていて、とても奇麗な虫だった。
相馬先生はタマムシについての話をきっかり十分間したのだが、その内容がとても面白かった。他のクラスメイトがどう思っているのかは解らなかったが、あたしにはとても面白く感じられた。
手応えを感じたのか、相馬先生はその日から毎回、始業のチャイムが鳴った後の五分ほどの間に授業と関係のない話をするようになった。落語でいうツカミやマクラだ。
テレビで話題のニュースを取り上げるくらいならよくあるのだろうが、相馬先生は話題にならないようなマニアックなネタを出したり、日常生活では当たり前の事柄を変わった切り口や目線で話したりもする。
そういった独特な発想や物事の見方もさる事ながら、雑学も凄いのだ。
最近はテレビでも雑学や豆知識を扱うバラエティ番組がたくさんやっていて、あたしも好きでよく観る。そこで出て来る雑学は確かに驚かされる内容が多いのだけれども、しかしそれは見聞きした一瞬だけの驚きだったり、へえそうなんだとただ感心するだけだったり、せいぜい明くる日のちょっとした茶飲み話になるものしかない。それはそれで面白いのだが、最近そういう番組が増え過ぎていて、あたしとしては少し食傷気味になっていた。
しかし、相馬先生の話は違う。驚くだけでは終わらない。感心するだけでは済まないのだ。
雑学を紹介し、それを歴史的事実と結び付け、さらには現代の事にまで引っ張り上げる。紹介する話題も、政治家や公務員の汚職や外交問題などといったとっつきにくいものもあれば、ラーメンブームやおもしろ動物など日常的なニュースだったりもする。ヨークシャテリアってよく見ると変な生き物だ、などという聞いた側が思わず何だそりゃと突っ込んでしまうような内容もたまにあった。
相馬先生の話はそんな様々な切り口から聞いている者の内側に入り込み、無意識というか、自分では気づいていない意識の側面をずんずん刺激してくるのだ。こりゃあ、たまりませんよ。
そんなこんなで、あたしはマクラを楽しんだ流れで自然と授業にも集中するようになり、その副産物が期末考査の満点なのである。
ベッドに横たわりながらそんな事を考えていたら――。
突然、一階の電話がけたたましく鳴った。
はっと眼を開け、時計を見ると、三十分ほど経っていた。
いつの間にか、うたた寝をしてしまったようだ。
カーテンの隙間から夕闇がこぼれていた。
電話には、誰も出る気配がなかった。
母は買い物にでも出掛けたのか。
電話は鳴り止まない。
留守電に切り替え忘れているのだ。
電話の音がいつもよりも騒がしく聴こえる。
仕方なく起き上がり、のたりのたりと部屋を出た。
部屋のドアを開けながら、二階にあった子機を壊した電話魔の弟を恨んだ。
一階に下りると、やはりリビングには誰もいなかった。
テーブルの上にあるメモ紙が目に入った。書き置きだろうか。

　メモ紙を視界の端に捉えつつ、あたしは受話器を手に取った。
「ーーはい、もしもし」
「もしもしはーちゃん？」
　電話の主は母さんだった。
「ああよかったやっと繋がった」
「どうしたの？」
　何だか慌てているようだ。
「何言ってんのどうしたのじゃないわよメモ見てないの？」
「メモってーーテーブルの上の？」
　あたしは手を伸ばし、置かれたメモを取った。
「何ノン気なコト言ってんの大変なんだからあなたも早く来なさい！」
　母さんが早口でまくし立てる。
「は？　大変って、何が？」
　そう言いながら、あたしはメモに記された文字を目で追った。
　稔がーー。
「稔が倒れたのよ！」
　ーー倒れて病院に運ばれました。
「え？」
「稔が倒れて病院に運ばれたのよ意識がまだ戻らないのよ！」
　母さんは先に病院に行っています。
「はーちゃんも早く来てタクシーで早く中央病院だからね！」
　ガチャリ。
　事態を理解させる暇も与えず、母さんは一方的に電話を切った。
　稔がーー弟が倒れて病院に運び込まれた。
　何の事やら、さっぱりわからない。
　弟が運び込まれたという中央病院は、あたしが好きな小説家が数年前に息を引き取った所だったな、と痺れた頭で考えた。
　何となく窓の外を見ると、太陽は沈みかけていて少し薄暗くなっている。
　夕方って、いいなあ。
　あたしは部屋に駆け戻ると、カバンから家の鍵のついたキーホルダーを外し、財布と共にポケットに突っ込んで家を飛び出した。
　母はタクシーを拾えと言っていたが、ここは住宅街だからそんな物すぐに見つかるわけがない。あたしは冷静だからそんな事ちゃんと判っていますよ。住宅街だからタクシーなんてすぐに見つかるわけがないんだから家から電話で呼べば良かったなんて後悔なんてしてはいませんよえええそりゃもうまったくあたしはまず大通りに出てそれに沿って病院に向かうのが一番早い途中でタクシーを見つけたらつかまえて乗ればいいしつかまらなくても走ればいいそれが一番早い最善の行動だと冷静に判断しその通りに実行した。
　至って冷静である。
　あたしは走った。
　平静を装って。
　タクシーを探す余裕なんてなかった。
　あたしは走る。
　走るあたしは。
　走る。
　走る走る。
　走る走る走る。
　左に並ぶ街路樹の合間から、太陽が沈んでいくのが見えた。

揺らめきながら、周囲を橙(だいだい)色に染めていく。
黄昏時(たそがれどき)――と言うのだろうか。
昼から夜へと移り変わる時間。
あたしは夕方という時間がとても好きだ。
夕方は現実が綻(ほころ)ぶように思える。
その綻びから、目眩(めくる)めくような夢の世界へ飛び出して行けそうな気がした。
――あれ？
あたしは足を止めた。
ふと、気付いた事があった。
あたしの背中をちりちりと――。
あたしの後頭部をちりちりと焦がすものがあるのだ。
ゆっくり振り返ると、視界の端から青い光が入りこんできた。
青だけではない。
白や紫、黄色に緑。
表現しきれないほど様々な色が混交しながら、あたしの眼を覆った。
そして――。
あたしは、門を見つけた。
目眩めく夢の世界への門扉(もんぴ)と、あたしは出遭った。

２．スポイル

二．スポイル

結局、その日の内に稔の意識は戻らなかった。

あたしが病院に着くと、意識不明のままの稔が集中治療室から別の病棟に移し替えられるところだった。

付き添っていた母が泣きながら容態について説明してくれたが、要領を得なくて何が何やらさっぱりわからなかった。

個室に運ばれた稔はぴくりとも動かないまま、手際の良い医師と看護師により生命維持の機械と繋がれていった。

大小さまざまな管(くだ)が、稔の身体のあちこちから延びている。

まるで機械の一部になったようで。

何だかーー。

とっても。

滑稽だ。

頬が引きつる。

あたしはとっさに口元を押さえた。

はーちゃんどうしたの。母があたしの顔を覗き込もうとする。

何でもないくしゃみが出そうになっただけ。あたしはそう言ったつもりだが、口元を押さえながら喋ったので、母にはフゴフゴとしか聞こえていなかっただろう。

稔の姿がおかしくて吹き出しそうになった。

そんな事、口が裂けても言えるわけがない。

引きつりが収まり、左手を下ろしたところに父が到着した。

父は良質の紙袋を手から提げており、その中には四角い紙の箱が入っていた。

三人で医師から稔の容態についての説明を受けた。

医師がレントゲン写真や分厚い医学書を開きながら、何やら小難しい単語を並べ立てた。

あたしは中二だからもちろん全く理解できないが、両親は大人だから理解しているだろうと二人の顔をうかがうと、これぞきょとん、という表情をしていた。親にも呆れたが、それ以上にこちらが理解できない説明をする医師に疑問を抱いた。

「もう一度申し上げますが、外傷は見当たりませんし、脳波も脈拍も正常です。すぐにでも目を覚ますかもしれません」

取りあえずは見守るしかありませんが心配する必要はないでしょう。医師に念を押され、あたし達は部屋を出た。

警察が事情を聞きに来るそうなので、あたし達は病院のソファに座ってそれを待った。事件の可能性でもあるのだろうか。

その現状を説明するためには、まず稔について語っておく必要があるだろう。

意識不明になった田島稔は、あたし田島葉摘の弟である。

年子(としご)とかいうのだろうか。あたし達は歳が一つしか違わない姉弟で、同じ中学に通っている。あたしが二年で稔が一年だ。

稔は、はっきり言って変な奴だ。ティッシュを噛む癖(ヘキ)があるあたしが言うのも何だが。

早生まれのせいか、背が低く体格はひょろひょろしている。

家でのあたしに対する態度は憎々しい事この上ないのだが、意外な事に学校では社交的でクラスをまとめたりもしているそうだ。

友達も大勢いるらしいのだが、家に連れてきた事がないので誰と仲が良いのかはよく判らない。まあ、友達と呼べるほどの友達が一人もいないあたしが言うのも何だが。

稔が友達を呼ばないのはそんなあたしが居るからかしら、などと考えたりもしたが、実際は単に自分の部屋に他人を入れたくないからのようだ。

しかし、その割に稔の部屋のドアは開きっ放しである事が多い。興味本位で何度か忍び込んだ事があるが、おかしな趣味があるようには見えなかった。

あえて挙げるとするならば――ラジオであろうか。
稔はラジオ番組を聴くのが好きだった。それもＦＭではなくＡＭばかり聴いていた。
三年前、父が忘年会のビンゴで当てた防水式ラジオを浴室に取りつけたのがきっかけなのだと思う。ＡＭが好きなのも、そのラジオがＡＭ専用だったからだろう。
稔は次の誕生日にＭＤラジカセを買ってもらい、どんどんラジオに没頭していった。テレビを観るよりもラジオを聴く時間の方が長くなり、あたしとのチャンネル争いもなくなった。
何がそんなに面白いのだろうかと、一度訊ねてみたかったのだが……。
これから、そんな機会が訪れる日は来るのだろうか。
稔は下校の途中で倒れたらしい。
中学からも家からも離れた神社裏の林の中で、制服姿でカバンを持ったまま意識を失くして倒れているのをその神社の神主さんが発見したのだそうだ。
それを聞き、稔は散歩好きだったという事を思い出した。
あたし達が住んでいるこの市(まち)は郊外のベッドタウンとして造られたいわゆるニュータウンというやつで、人工的ではあるが緑も多い。丘陵地帯を切り拓いて造った都市なので、眺めが良い場所もたくさんある。当てもなくプラプラ歩き回るだけで結構気晴らしになるのだ。
ただ、稔の散歩はそうではない。
気晴らしのためではない。
目的があるのだ。
目的なく歩くのが散歩ならば、目的のある稔の行為は散歩とは呼べないのかもしれない。
稔が歩き回る目的。
それは――宝物探しである。
宝探しではない。
地中に埋まった財宝を探し求めたりしているのではない。
宝探しではなく、宝物探しなのだ。
稔は自分にとっての宝物を見つけるために歩き回っていた。
こういう言い方をすると、宝物の意味が自分探しなどの哲学的な思索のように聞こえるかもしれないが、そういう事でもないのだ。
稔が探している宝物は、財宝ではないが自分でもない。
財宝ではないが、それには形がある。
自分ではないが、それが何かはわからない。
説明するのは難しいが、例えるなら小学生が良い形をした木の棒を見つけるのと同じ感覚なのである。
とにかく、直感的にこれだと思う自分だけの物が見つかれば満足するのだ。
稔が宝物探しを始めたきっかけは、どうやらあたしにあるらしい。
あれは、あたしが小学校に入学したばかりのときの事。
授業で行った市内で一番大きい公園で、あたしは宝物を拾った。
薄汚れた、小さな鍵だった。
土で汚れているだけでなく、古びて表面自体にも白い斑点が浮いていた。
アラベスク模様というのだろうか、蔓草(つるくさ)の装飾が施されていた。
安っぽい真鍮(しんちゅう)製ではない。持ってみると、見た目以上の重みがあった。鉄のようなずしりとした乱暴な重さではなく、特別な価値の重みを感じさせた。
拾ったその場で教師に渡したのか、持って帰って母に渡したのかはよく覚えてはいないが、いずれにせよその鍵は遺失物として警察に届けられた。
しかし、持ち主は見つからず、鍵はあたしの手許に戻って来た。
欲しいと言った覚えはないのだが、何だかよく判らない内に鍵はあたしの物となったのだった。
自分の物になった途端、表面の汚れがどうしても気になったあたしは、母と一緒に薬品で拭き取った。
凄く奇麗な金属だった。

心の奥底まで照らすような光を放つそれは、この世に存在する金属の中で最も高貴なものであるように思えた。
あたしはその感想を母に伝えた。
もちろん金属だの高貴だのといった単語は使っていない。小学一年生が使える限りの語彙を駆使し、キレイな色をしているとか王様の鍵だとかそんな事を言ったのである。
「本当にキレイだね。多分、これは銀よ。銀は高価(たか)いのよ。装飾も凝っているから、もしかしたら美術品なのかもしれないわね」
母は微笑み、そして付け加えた。
「でもね、はーちゃん。銀は王様じゃないわよ。王様が使う物は銀ではなくて、金でできているのよ」
それを聞き、当時のあたしはかなり驚いた。
こんなにキレイな物を使わないなんて、王様はどうかしてる。あたしは心底そう思った。
そんなこんなで、その日から銀の鍵はあたしの宝物となった。
母が要らない革製のハンドバッグを加工し、鍵のケースを作ってくれた。それからというもの、あたしは毎日小学校から帰るとすぐにそのケースを首からぶら提げて遊びに行った。
その鍵は、家族以外の誰にも見せた事がなかった。ケースから出すのも一日一度、寝る前に眺める時だけだった。
そんな日々が一年ほど続いたある日、小学校に入ったばかりの稔が授業で行った先の市内で一番大きい公園で行方不明になった。
騒ぎになりかけたが、暗くなる前に見つかったので大事には至らなかった。
稔は公園を囲む林に入り、そこからいつの間にか公園の外に出てしまったらしい。
少し離れたところにある別の公園をふらふらしているところをその近くに住む人に発見された。
保護された後、親や教師がいなくなった理由を訊ねてみると、稔はあっけらかんとこう答えたそうだ。
「たからものをさがしてた」
つまり稔は、そのちょうど一年前に同じ公園であたしが宝物の鍵を見つけた事を覚えており、同じように自分にも宝物が見つかると考えて徘徊していたのだ。
物をねだる事が少なかった稔に、母は欲しい物を買ってあげると言ったが、稔は頑(かたく)なにそれを拒んだ。
あたしの鍵が欲しいのかとも思ったが、どうやらそうではないようだった。
おそらく、稔は自分が欲しがっている物が何かを具体的に想像していなかったのだろう。
自分には自分だけの物が見つかる。
見つかった物が自分の宝物なのだ。
稔はそう考えていたのではないか。
そうやって稔の趣味に宝物探しが加わった。いや、稔にとっては初めての趣味だったのかもしれない。
稔は休日の度に自転車を駆って市内のあちこちに出かけ、日が落ちるまで何時間も地面を見ながらぶらぶらしていた。
そんな変人でありながら、友人関係はしっかりと繋いでいるという孤立と社交を絶妙なバランスで成立させるセンスの持ち主だった。
しかし家ではずっと変人モードだったため、母は事あるごとに、
「はーちゃんが宝物なんて見つけなければ良かったのにねえ」
と、あたしにこぼすようになった。
そんな事を言われても困る。
物心がついたかどうかのころの話で、しかも見つけたくて見つけたわけではないのだ。
警察にだって届けたじゃないか。
戻って来たのはあたしのせいじゃない。
大体あたしは欲しいなんて思ってなかったんだ。
母さんだってキレイだねって一緒に喜んだじゃないか。
それから少しずつ、あたしは家族に心を許せなくなっていった。
本音を言う事も、愚痴や弱音を吐く事もなかった。
日常会話はするにはする。けれど、表面上は普通でも、思った事を口にするのは十回に一回もない。

それどころか聞いて欲しいと思う事すらなくなっていった。
それに気付いていない母は、毎日のようにどれだけ稔を心配しているかをあたしに話してきた。
うざったいったらありゃしないが、それくらいならまだいい。
愛想笑いをしながら適当にあいづちを打ってやり過ごせばいいのだから。
しかし面倒くさい事に、話の着地点は大抵あたしの事なのだ。
あたしが変な子だから稔もそれを見て真似をするんだ、とそれていき、最終的にははーちゃんがしっかりしなきゃだめよと軽いお説教をされる。そりゃ愛想笑いも引きつるってもんですよ。
ーーおっと愚痴になってしまった。話を戻そう。
簡単に言ってしまえば、稔には小さい頃からプチ徘徊癖(ヘキ)があったのだ。
そして今日、徘徊していた林で昏倒し、病院に担ぎ込まれたが意識はまだ戻っていない、というのが現状なのである。
警察を待つ事三十分、顔を伏せたままの母がぽつりと呟いた。
「どうして、原因も何もわからないんだろうね」
あたしに言ったのか父に言ったのかは判らないが、父はいつも通り黙っていたので、仕方なくあたしが口を開いた。
「稔の事？」
「うん、そう。お母さんね、二十一世紀になって科学も医学も魔法みたいに進歩したと思ってたけど、本当はそうでもないんだね」
そうだね。あたしは曖昧に返した。
やり過ごそうと思ったんじゃない。思う事はたくさんあるのだが、何て言っていいのかが解らなかったのだ。
テレビで垂れ流しになっている情報を見る限りでは、確かに医学は進歩しているのだろう。
癌(ガン)は早く発見できれば高い確率で助かるそうだし、ＣＴだのＭＲＩだのと病気を発見するための機器の名もよく耳にする。脳の仕組みについても、どの部分がどんな感情を司るのかとか、脳の神経と神経を繋ぐシナプスがどうのとか、そんな風に人体の仕組みはどんどん解明されつつあると聞く。その他にも、遺伝子やら骨髄や臓器移植やら免疫やらと様々な分野の研究が日夜進められ、母の言う通り医学はまるで魔法のように万能なものだと多くの人が思っていたのではないだろうか。
親しい人が病気で亡くなった経験がないからか、あたしには医学がそれほど素晴らしいものだと考えた事はなかった。それでも、自分の弟が倒れ、その原因も症状も治療法もさっぱりわからないという現実を目の当たりにすると、母の言葉にも頷けるような気がした。
ーーでも、特に口にするほど感情が昂(たかぶ)らないのだ。
稔が倒れて意識がない事が大変なのはわかる。医師はすぐ良くなると言っていたが、そうならない可能性もあるだろう。稔はこのまま意識が戻らず、植物人間になってしまうかもしれない。最悪の場合、容態が急変して死んでしまうかもしれない。
意識が戻らない。
植物人間。
死ぬ。
ーーだから。
だから何だというのだ。
人は必ず死ぬものだろう。
死んだら死んだ。
ただそれだけの事ではないのか。
死にたくないと思う気持ちはわかる。
しかしよく考えてみたら、そもそも生まれたくて生まれてきたわけではないのだ。
生まれたくなくて生まれる。
死にたくなくて死ぬ。
同じ事ではないか。
生と死は同じ意味を持つ。

生と死は等しい価値を持つのだ。
「何でこんな事になっちゃったのかしら……」
母は言う。
そんなの知ったこっちゃない。
――何で稔が倒れたのか。
――何で稔は意識不明になったのか。
さて、母は誰のために悩んでいるのだろう。
稔が植物人間になったらどうしよう。
稔が死んでしまったらどうしよう。
何で。
どうして。
どうしよう。
どうすればいいのだろう。
――そうか。
そうなのだ。
結局、自分なんだろう。
母は無意識の内に、自分の不安を解消するために稔が倒れた理由や意識が戻らない理由を考えている。
母は知らず知らずの内に、もし稔の意識が戻らなかったら自分はどうすればいいのかを考えている。
稔を心配している風で、結局は自分の事を考えているのだ。
巡り巡った末、辿り着くのは自分への愛なのだ。
――でも、それも仕方のない事だと思う。
自分が産んだ息子とはいえ、別の人間なのだから。
人間の愛なんて、理想という飾りを取り払ってしまえば、残るのは剥き出しのエゴになってしまうのだろう。
自分――。
結局、自分なのだ。
ケダモノと大して変わりがない。
自分をどう保持していくのかが問題なのだ。
自分以外の人間は、自分を保持するためのものなのだ。
ああ、醜い。
この上なく醜い。
趣味だか何だか知らないが、自分勝手な事をして倒れた稔も。
無自覚のまま、自分の心の安定を保とうとしている母も。
一言も喋らず、何を考えているのか判らない父も。
みんな自分の事しか考えていない。
醜い。
――そして。
そして、何より。
誰よりも醜いのは――。
あたしだ。
こんな事を考えているあたしなのだ。
弟が倒れたのに心配もせず、不安にもならず、悩みもせずにいるこのあたしなのだ。
そこに思い至ると後ろめたさが込み上げて来て、じっと座っていられなくなった。
「ノド渇かない？　自販機行って来るけど」
あたしは立ち上がり、いらないという母の返事を聞く前に歩き出した。
何も言わない父の視線を背中に感じながら。
五分ほど歩き回り、ようやく自販機を見つけた。

日はとっくの昔に沈んでおり、夕食時も過ぎていた。
悲しくても腹は減るんだな、それが生きているって事なんだ、なんてテレビドラマの台詞で聞いた覚えがあるが、今のあたしは悲しくなくて腹も減っていない。
生きている事の真逆だから、あたしは死んでいる事になるのだろうか。
自販機の品揃えを見渡すと、パックのジュースばかりだった。
「コーラはないのかよコーラは」
あたしはひとりで毒づいた。
病院にはないだろう、たぶん。
健康を害するイメージが強いから。
タバコの自販機がないのと同じ理由である。
――何だと。
あたしの命の水、コーラ様がタバコと一緒だと。
ふざけんなよ。
イチゴ牛乳を買おうとあたしは百円玉を入れた。
購買可能の赤いランプがつかない。
ひゃ、百五十円だと――。
どんだけ中間マージン取ってんだ、人の足元見やがって。
あたしは五十円を追加し、イチゴ牛乳の番号を見た。
駅や路上にある欲しい商品のボタンを押すタイプではなく、健康ランドなどにある番号を入力するタイプの自販機だった。パンやお菓子の自販機もこのタイプである事が多い。
五品ずつ六段の計三十番あり、イチゴ牛乳は十一から十三番。
十三番にしよう。
不吉な数字だが、弟の心配をしないバチ当たりがこの数字を選べばマイナス×(かける)マイナスでプラスに転じるかもしれない。
あたしはまず一を押し、そして三を押した。
これで十三番のイチゴ牛乳が押し出され、下に落ちてくるはずだ。
あたしは、視線を商品の並んでいるケースの中に移した。
ベルトコンベアが動き、十三番のイチゴ牛乳が押し出されーーは、しなかった。
替わりに最上段の左端から、ただの牛乳がごとりと落ちて来た。
あたしは愕然とした。
なぜイチゴ牛乳の番号を押して牛乳が出てくるのだ。
壊れてんのか、このヘッポコ自販機。ふざけんなよ。
カネ返せ、と返金レバーを何度も乱暴に下げながら、その下にある番号ボタンの列を見て、あたしは自分の間違いに気が付いた。
ボタンの列は横に五列と縦に六段の計三十個あった。
ケースの中の商品も五品ずつ六段の計三十品目。
二つは対応していたのだ。
つまり、一番の牛乳が欲しければ一番のボタンを、三十番のオレンジジュースが欲しければ三十番のボタンを、十三番のイチゴ牛乳が欲しければ十三番のボタンを押さなければいけなかったのだ。
しかしあたしは何を勘違いしたのか、まず十の位の一、次に一の位の三、と一桁ずつボタンを押してしまった。
そして自販機は最初の一だけを有効とし、一番の牛乳を出した。
機械は間違っていなかった。
間違えていたのはあたしだ。
あたしが間違っていた。
居てはいけない。
あたしなんて。

居ては――。
ざわつきかけた心に、あたしは静かにブロックをかけた。
「あの、田島稔くんのご家族の方ですか？」
背後からおもむろに声を掛けられ、驚いたあたしはびくりと背筋を伸ばした。我ながらわかり易いリアクションだ。
振り向くと、グレーの背広を着た若い男が立っていた。
「あ、ごめん。驚かせちゃったね」
男はそう言うと、懐に手を入れた。
「中央署の原田(はらだ)といいます。田島稔くんについて話をうかがいに来た――」
警察官です。男は黒い手帳を取り出した。
これが警察手帳か、テレビで見たより地味なんだな。
と、心の中の方は冷静であったのだが、心の表面は放心状態で何も言えなかった。
「もしかして、稔くんのお姉さんかな？」
それを察したのだろうか。原田という刑事は優しい口調で訊ねてきた。
「はい」
あたしは声を上擦らせながら返答した。
「ご両親はどちらに？」
手帳を懐にしまいながら原田刑事は言った。
「あ、あっち」
まだ驚きから立ち直れていないあたしは思わず両親が居る方を指差してしまった。
指の差す方向を見た原田は目を丸くした。
あまりに正確であったため、指差した先は壁だったのだ。
「そうかあ。困ったなあ」
原田はあたしの方に向き直り、苦笑した。
困らせてすいませんあたしは駄目な人間ですすいません今すぐここから消え去りますので許してください。
「いやいやいや、こっちの話ね。君に困っているんじゃないよ」
違う違うと原田は両手を振った。
「恥ずかしいからここだけの話にして欲しいんだけど、もう一人先に来てるはずなんだ。おじさんの刑事なんだけどね。その人から聞いた細かい場所をうっかり忘れてしまって」
当てずっぽうで歩いてたら迷ってしまったんだ、あはは。原田は頭を掻いた。
「そうですか」
動揺から立ち直っていないあたしの表面は、愛想のカケラもなく言った。
愛嬌のある人だなあ、とあたしの冷静な部分は思った。
「というわけで、案内してもらえると助かるんだけれど、どうだろうか」
気恥ずかしそうに原田は言った。
若々しいなあ、とあたしは思った。
着る服が違えば大学生で通るかも。
――実際には大学生なんてまともに見た事もないのだが。
「こっちです」
言うなりあたしは歩きだした。
あたしの表面は無愛想にもほどがあった。
あたしの冷静な部分は、
「こちらです」
の方が丁寧だったかな、と反省した。
「ありがとう。お願いするよ」
その言葉が背中に当たり、何だかむずがゆかった。人に感謝されるのなんてずいぶん久し振りだった。
原田を連れて戻ると、両親と初老の男が話をしていた。

「遅くなってすいません、竹脇(たけわき)さん」
　原田が平謝りをした。
　しかし竹脇という老刑事は原田を一瞥し、話を続けた。原田は気まずそうに鼻の頭を掻く。
　失敗したのに何も言われないというのも、結構キツいのかもしれない。
　週に何回か、学校で叱られる同級生を見る。あたしには叱られた経験はないが、見ているだけで、ああ叱られたくないなあと思う。
　おそらく、大声で叱責されると心の表面の部分が刺激されるのだろう。さっきあたしが驚いたのと同じように表面が動揺するのだ。
　しかし、何も言われなかったり無視されたりすると、おそらく中の方の冷静な部分が動揺してしまうのではなかろうか。
　どちらもキツいが、後者は特に耐えられない。
　他人と付き合わないのも、冷静な部分を揺さ振られたくないからなのかもしれない。
　竹脇と原田は早々と帰って行った。事情聴取は十五分も経たずに終わったが、喋っていたのはほとんど母で、父はやはり終始無言だった。
　しばらくして病院から出たあたし達は、近くのファミレスで夕食を取る事にした。
　道すがら、何を聞かれたのかを母に訊ねた。事件性は低いようで大した質問はされなかったらしい。稔の普段の様子や趣味、交友関係だとか、持病はないのかとか、そんな感じの事を取りあえず聞かれたそうだ。
　警察ってのはそんな取りあえずの事も調べておくのか。
　よっぽどヒマなのね、とあたしは思った。
　この市(まち)は平和だな、とあたしは思った。
　――何が平和だ。
　弟が意識不明だってのに本当に不謹慎な女だあたしは。
「おめでたい日なのに、大変な事になっちゃったね」
　歩きながら、母が呟いた。
　また愚痴か。もううんざりだよ。
　――ん？
　おめでたい？
　何が、とあたしが問う前に、
「お誕生日のお祝い、できなくなっちゃってごめんね」
　母が許しを乞うように、力なく笑って言った。
　ごめんって何だ。
　あたしに何を許せと言うんだ。
　大人が子どもに甘えるんじゃない。
「帰ったら、ケーキだけでも食べよう」
　父が手から提げた袋を持ち上げて言った。
　今日初めて、父の声をまともに聞いた。
　そこで――。
　あたしはようやく、今日が自分の誕生日だという事に気がついた。
　手に握った牛乳が、未開封のままぬるくなっていた。

３．エチュード

三．エチュード

七月二十日・水曜日・午前七時半。

あたしの誕生日の翌日から、夏休みが始まった。

いや、あたしの誕生日の翌日が海の日だから、あたしの誕生日の翌々日から夏休みは始まった、と言うのが正しいのだろう。

つまり、あたしの誕生日は海の日の前日の七月十九日で、今日はその翌日の七月二十日の海の日だという事だ――などと、回りくどい言い方をしてみる。

……いいじゃないか。

予定調和なんて犬に食わせてしまえ。

――ああ、すいません。

あたし、今、とんでもなく混乱しているのですよ。

もう何が何だかわけが解らないのである。

あたしの心の中の方は、ぐらぐらと動揺していた。

あたしの表面は冷静で、「彼」と普通に話をしていた。

昨日、原田さんに声を掛けられた時とはまったく逆の心理状態である。

――しかし、「彼」と呼んでいいのだろうか。

「君は、男の子？」

あたしが問い掛けると、

「性の別は、ワタシにはない」

彼は小さな体を震わせながらそう答えた。

「ワタシは男でも女でも無く、同時に男でも女でも在る」

あたしが彼の言う事を半分も理解できずにいると、彼はそれを察したようで、

「――ただ、それはワタシの世界での話。こちらに来た以上、この世界の住人である葉摘がワタシを理解する上で性別を必要とするのならば、ワタシは男であると認識すればいい」

と付け加えた。あたしが言うのも何だが、回りくどい。

しかし、男でも女でもなく、同時に男でも女でもあると言ったばかりなのに、男で良いとはどういう事なのか。

あたしが訊ねると、

「単に、ワタシが使っているこの躯体(カラダ)が男の属性を強く持っているからだ」

彼はそう答えた。

「え？　体が男なら、あなたは男の子なんじゃないの？　男でも女でも無くて男でも女でも在る、なんて面倒くさい事言う必要ないじゃない」

浮かんだ疑問をそのまま口にすると、彼はぴたりと動きを止め、頭部の突起を上下させた。あたしは、それはため息を吐(つ)くのと同義の仕草なのだと悟った。

「ふむ。葉摘は女の体(カラダ)だから女なのか？」

「え……」

彼の質問に、あたしは戸惑った。

あたしは女である。なぜかと言うと、それはもちろん肉体が女だからだ。

「葉摘の体(カラダ)が女の属性を持っていると認識するのは、誰だ？」

あたしの肉体が女であるという事を認識し、あたしが女であると判断を下すのは誰なのかと言うと――。

それは、あたし自身だろう。

では、その認識をして判断をするあたしとは、一体何なのだろうか。

あたしの心――なのだろうか。

じゃあ、心とは一体何だ。

女であるあたしの心が、あたしの肉体が女であると認識して、あたしが女であると判断する。

何だこれは。
論理が果てしなくぐるぐると回り続ける。
始点が定まっていない。
けれども、あたしはあたしであり、あたしは女である。
始まりの点がないのに、いつの間にかあたしは始まっている。
一番重要である根っこの部分があやふやで曖昧である。
けれども、あたしはあたしをやっている。
あたしはあたしという存在をよく知らないのに、あたしとして存在している。
何だか気持ち悪い。
何が何だかさっぱり解らん。
――いや、それは嘘だ。
本当は、あたしはその答えを理解している。
理解しているが、それを認めたくない。
理解しているのに理解したくない。
だから気持ちが悪いのだ。
あたしとは、何だ。
あたしとは――。
あたしの、心。
心――。
「君の心は君という存在そのものではない」
彼が言う。
ヒントを出したつもりなのだろうか。
あたしの心は、あたしという存在ではない。
あたしの心は、あたしではない。
一体どういう意味なのだ。
解るように言えコラ。
「田島葉摘という存在とは、田島葉摘の肉体そのものなのだ。解るか？　田島葉摘の心が田島葉摘なのではない。田島葉摘の肉体こそが田島葉摘なのだ」
「はあ？」
あたしは余計に混乱した。
彼は答えを言ったつもりなのだろう。
だが、あたしが理解できなかったら何の意味もない。
どういうこっちゃどういうこっちゃ。
あたしの心は、あたしではない。
つまり――そうか。
今、こうして考えているあたしは、あたしではないという事か。
考えているのは心。
心が考える。
いや、考えるのは心じゃない。
考えるのは脳だろう。
心も、意識も――。
そうだ。
脳が作り出しているものだ。
脳は――そうか、脳は形がある。
心に形はないが、脳には形がある。
単純に言えば、脳は体の一部である。

　脳は、一つの器官でしかないのだ。
「それは、あたしという存在を考える心は脳が作るもので、その脳が体の一部だから、って意味？　つまり、あたしという存在はあやふやな心ではなく脳――肉体の一部だと、あなたは言いたいの？」
　あたしは考えを必死にまとめて言葉にした。
「少し違うが――的を外してもいないか。まあ、そんなところだろう」
　体を震わせながら偉そうに言う彼にカチンと来た。
「どういう事？　はっきり説明しなさいよ」
　そんなに興味があるわけでもないのに、あたしは思わずムキになってしまった。
「自分という存在が脳の一部である、という点が正しくない。自分を認識するのが脳である、つまり脳が認識して初めて、田島葉摘という存在は意識の上に浮き彫りとなると言いたいのだろう？」
　あたしは頷いた。
「しかし、脳が認識しなくとも、田島葉摘は田島葉摘として存在しているのだ」
　彼の言葉はさらなる疑問を呼ぶ。
「あたしとして認識されなくても、あたしは存在している？　あなたが言っている事、解るようで解らないんだけど」
　混乱を通り越して腹が立ってきた。
　こいつは何を言いたいんだ。
　大体、お前は何なんだ。
　誰なんだお前は。
　急にあたしの部屋に現れやがって。
　朝起きたらいきなりあたしの部屋の窓辺に居座ってやがって。
　起き抜けのあたしにいきなり話し掛けてきやがって。
　言葉を話せる形をしてないクセに、
「君の名は？」
　は、ないだろう。
　いつの時代の壮大な恋愛ドラマだ。
　すれ違うところだけ一緒だな。
「は、葉摘。田島葉摘だけど」
　名乗るあたしもあたしだ。
　素性の知れない輩に対してほいほい名乗るのは正直言ってバカだ。
　まして――。
　まして人間ではないのだ。
　こいつはどう見てもム――。
「世界には、幾つの種類があると思う？」
「え――」
　彼の唐突な質問に、あたしは再び戸惑った。
　世界の種類だって？
　何を言ってるんだお前は。
　と思いつつも、あたしは必死に答えようとしていた。彼からは、有無を言わせない圧力のようなものが発せられていたからだ。
「二種類かな。心の中の世界と、目に見える世界の二つ」
　何とか思い付いた答えを口にした。
「内側の世界と外側の世界――という事か？」
「うん」
「ふむ。根本的な部分に誤認があるようだが、敢えて正さず進めるか。追い追い訂正するとしよう」
　いちいちシャクに触る物の言い方である。
「――で、何？」

「葉摘の見識をワタシなりに解釈すると、内側の世界は心の世界。精神の世界とも、夢の世界とも言える。外側の世界は肉体の世界。物質の世界とも、現実の世界とも言える――まずは、これで良いかな？」
　あたしは頷いた。
「それでは、ワタシと葉摘が今居るこの世界は、内と外のどちらの世界だと思う？」
「……外の世界かな」
「その通りだ。この外の世界における存在とは、言ってしまえば物質そのものなのだよ」
「物質そのもの――だから、あたしという存在は心にはないと言ったのね」
「そうだ。君という存在は心の中にはない。心そのものでもない。肉体は存在の物質的側面などではない。肉体こそが本質なのだ。君という肉体が先に在り、その器に合う心が内なる世界に生じる。それが――自我だ」
「あたしという自我が後から生まれる？」
「自我とは後から付けられたもの――実体のない仮初(かりそめ)のものでしかないという事だ」
「え、それって」
　どういう意味なの――と続ける前に、彼は答えた。
「仮初のものである自我は、この外の世界――物質世界の真の姿を認識できていないという事だよ」
　あたしは言葉を失った。
　あたしの見ている現実は、現実ではない？
　仮想現実だとでも言いたいのか？
　混乱するあたしを尻目に彼は言葉を続けた。
「物質世界の真なる姿は一つ。しかし、それは人間一人一人の目にそれぞれ違う映り方をするのだ。全ての人間が外の世界を同じ様に見聞きし、同じく共有しているのではない。同じ世界を見ているようで、映る世界は各々の個体で異なっている。解るか？　同じ世界を共有しているのではない。異なる世界を、同じ世界として擬似的に共有しているのだ。解るか？　君の見ている現実とは、共同幻想でしかないのだよ」
　同じ世界だけど、違う見え方をしている？
　本当の現実世界は、誰も見る事ができていない？
　現実の世界は一つだけれど、認識される側の中でそれぞれ異なる世界があるって事？
　本当は違って見えているのに、あたし達は同じ世界を同じ様に見ていると思い込んでいる？
　つまり、人間の体は現実世界に存在するのだけれど、それぞれの心――自我は仮想現実の中にあるという事なのか。
　世界の真の姿は、誰にも見えていない。
　目に見える現実はその人間だけのもの。
　現実は、自分だけのもの。
　自我は仮初のもの。
　自分しかいない。
　現実には――。
　自分しか――。
　あたししか。
　いない。
　それって。
　それって――。
「それって、あたしがずっと考えていた事じゃないか」
　思わず口に出してしまった。
　世界は明確に定まったもので、誰の目で見ても解る秩序で構成されていて、そんな世界を全ての人間が共有して生きている。
　世界を共有できないあたしのような人間は、世界に存在してはいけないのではないか。
　あたしはそう思っていた。
　――そんな事はない。
　あたしみたいな人間だって、存在していいはずだ。

実際に、こうして存在しているじゃないか。
あたしはここに存在しているじゃないか。
あたしの居場所は、あたしの中にある。
あたしの居場所は、あたしの世界だ。
あたしは、あたしの世界に居る。
あたしの――。
あたしだけの。
――世界。
彼は、それを肯定したのだ。
何だ。
何なんだ。
こいつは――。
こいつは一体何なのだ。
「ちょっと待って。どうしてそんな事が言えるの？　あたしの心が仮初のものだって、どうして言えるのよ」
「それは、ワタシが内なる世界――夢の世界の住人だからだ」
「夢の――世界？」
「そう。夢の世界の住人は、この現実世界の住人とは全く逆の存り方をしている」
「全く逆って、どういう意味よ」
「既に言ったように、現実世界では肉体そのものが存在の本質であり、心や自我、意識などは全て後から擬似的に作り出された仮初のものだ。しかし、夢の世界ではその心や自我、意識そのものが即ち存在なのだ。夢の世界では肉体は必要ない。この世界の住人が、肉体から存在するように、ワタシ達は心から存在するのだ」
「それってつまり、あたしの心が仮初であるように――」
「そう。葉摘という自我が仮初のものであるように、ワタシにとってはこの躯体(カラダ)が仮初のものなのだ」
彼は言う。
つまり、あたしは「あたしの心」という仮初のもので「彼の躯体(カラダ)」という仮初のものを認識しているという事だ。
何だか――。
何だか、生きる事がとても空虚で、無意味なものであるような気がしてきた。
しかしよく考えてみれば、自分以外の人間の心を察したり、気持ちを読み解いたりするのも、それと大して変わらない空虚で無意味な行為なのではないか。
人間だけでなく、現実世界での全ての存在は物質そのものであると彼は言う。
それは、現実世界では生き物は特別な存在ではなく、生きていない機械も石も水も全て同じ価値、同じ意味を持つという事になる。
いわんや人間をや――である。
生物と非生物が同じ価値を持つのだとすると、生物の中の人間、更には人間一人一人の個性など、考えれば考えるだけ無駄なのではないか。
存在は、全て等価値。
生命(いのち)なんて、空虚なもの。
人間なんて、無意味なもの。
個性なんて、考えるだけ無駄。
――じゃあ。
じゃあ、何で。
何で、人間は。
どうして、あたしは。
あたしは、どうして生きているのだろうか。
眩々(くらくら)する視界の端に、固まったように動かない彼が居た。

　あたしは、生命の意味について彼に問おうと思った。
　存在が同じ価値なら、生命って何なの？
　あたしは、どうして生きているの？
　あなたにとって、生命って――。
「あなたにとって――」
　そこまで言いかけた所で、彼はあたしの言葉を遮るように翅(はね)を広げた。
「ちょっと待ってくれ！」
　急に語気を荒げる彼に対し、あたしは何が何だか解らず、ただ言葉を失った。
「……済まない」
　広げた翅をしまいながら彼は弱々しく謝った。
　彼の小さな体が更にしぼんだように見えた。
「どうしたの？」
　あたしは恐る恐る訊ねた。
　言葉が通じるので少し安心していたが、いわく彼はこの現実世界の存在ではないのだ。
　彼自身、ワタシは夢の世界の住人だ、と言っている。
　その真偽はさておき、彼がいつあたしに危害を加えてくるのか、彼が何を企んであたしの前に現れたのか、予想も見当もつかないのである。
　生命の価値も意味も解らないけれど。
　あたしは今、あたしの生命を。
　――守りたいと思った。
　守ろうとした。
「済まない」
　彼はもう一度謝った。
　ひどく混乱しているようで、頭部の突起物が小刻みに震えている。
「どうしたの？」
　あたしはもう一度訊ねた。
「ケガしてるのどこか痛いの調子悪いの？」
　返答を待たず、あたしは早口で続けた。
　彼が次に発する言葉が怖かったからだ。
　あたしの表面は恐怖を感じていた。
　あたしの深い部分は冷静で、今の早口は母さんみたいだったと思っていた。
「――いや」
　彼はうなだれていた頭部を上げた。
　震えはもう収まっている。
「何故か――急に、苛立ってしまって」
　それまでの全てを見透かしたような口振りから一転し、動揺を隠せないまま喋っているのがよく解った。
「苛立ったって――あたしの物分かりが悪いから怒ったって事？　あたしが、あなたの言う事を全然理解できないから？」
　再び翅が開いた。
「うわっ」
　あたしは声を上げ、思わず後ろに飛び退(の)いた。
　彼から目が離せない。
　さっきは外側の硬い翅が開いただけだったが、今度は内側の柔らかい半透明の翅も飛び出した。オモチャのような瞳はこちらを威嚇するかのように赤く染まっていた。
「はーちゃん、どうしたの？」
　母が階下から訊ねてきた。

　あたしは彼に焦点を固定させたまま部屋のドアを開け、
「何でもないハチが入って来てビックリしただけもう追い出したから平気」
　と答えた。それを信じた母の、
「ちゃんと窓閉めとかないからよ」
　という言葉を最後まで聞かず、あたしはドアを閉めた。
「済まない、葉摘。済まない――」
　彼は何度もあたしに謝っている。
　必死に自制しているようだった。
　目の威嚇色は徐々に薄まり、黒ずんでいく。
　広げた内側の翅は折りたたまれ、それに蓋をするように外側の翅が閉じられた。
「――済まなかった。驚かすつもりはなかったんだ。許してくれ葉摘」
　うん大丈夫だよ。あたしはその場にへたり込みそうになるのを堪えながら答えた。
「ありがとう。許してもらえて安心した」
　心底安堵したように彼は言う。
「でも、一体どうしたの？　いきなり怒り出したりして」
　そう言いながら、あたしは自分の表面の冷静さに驚いた。さっきまでは怖くて仕方なかったのに。
　逆にさっきまで冷静だった心の深い部分は、今にも嘔吐しそうなほど追い詰められていた。
「葉摘がワタシの話を理解できていないから怒ったのではない。葉摘は、ワタシの言う事を十分に理解している」
「じゃあ、どうして？」
「ワタシは――自分でも信じ難い事なのだが、どうやらワタシは二人称で呼ばれる事を不快に感じるらしいのだ」
「二人称？」
　あなた――と呼ばれるのが不快という事か。
「何故だかは自分でもよく解らないのだが……葉摘。ワタシを呼ぶ時は、できれば個有名で――名前（ナマエ）で呼んでもらえないか」
　彼は哀願するような声を出した。
「それは良いけど――でも」
　言っていいのだろうか。
「でも？　何か問題でもあるのか？」
「まだ、名前聞いてないから」
　呼びたくても呼べないよ。あたしは言った。
　そうなのだ。
　実はまだ、あたしは彼の名前を聞いていなかった。
「そうか、失念していた」
　彼は言う。
　呆れた話である。
「夢の世界ではどうだか知らないけど、こっちの世界ではね、親しくなるにはまずちゃんと自分の名前を名乗らなきゃいけないんだよ」
　あたしはしてやったりと言わんばかりの口調で言った。さっきやり込められた仕返しである。
「あたしの名前はもう言ったよね。次はあな――」
　あなたの、と危うく言いかけたが何とか押し留めた。
「――どうぞ」
　あたしは彼に名乗るよう促した。
「ワタシの名前はエンジュ」
　槐（えんじゅ）という――。
　彼はそう言うと、あたしを向いて頭部の突起を静かに下ろした。
　お辞儀をしたように見えた。

槐だって。
変な名前。
天使のつもりかしら。
雲が動いたのか、夏の日差しが窓辺ごと槐を照らす。
光を享(う)け、槐の硬そうな表皮が不思議な色に輝いた。
緑色のような――。
紫色のような――。
透き通った青のような。
刹那の度に色彩が千変万化する。
「よろしく――槐」
まるで、万華鏡を見ているようだった。
あたしは目を奪われた。
まるで、夢を見ているようだった。
同時に、心も奪われた。

四．インターヴェンション

七月二十一日・木曜日・午前十時。

そんなこんなであたしの夏休みは始まった。

起床するなり、稔が倒れた神社に行く準備を整えた。

稔が倒れていたという神社には、小さい頃に家族で何度か初詣に行った事があった。家からも中学からも同じくらい離れている場所にあり、歩いて二、三十分といったところだが、日常的に運動をしないあたしにとっては地獄に等しい距離である。なぜか神社行きのバスもないため、自転車を使う事にした。

家に市内の地図がないか探してみると、あるにはあったが十年位前の少し古い物だった。でもまあ神社なんて昔からあるだろう、と記されている場所をマークし、それを持ち出した。

槐は連れて行く事にした。部屋に残して母にでも見つかったら面倒だからだ。

しかしなぜか、槐は外に出るのを嫌がった。詳しく話そうとはしなかったが、何かをひどく恐れているようだった。おそらくは、虫みたいな紛らわしい外見をしているから、昆虫マニアにでも追い駆けられて痛い目を見たのだろう。

「大丈夫。あたしがいるから」

あたしはそう言い切った。槐がうんともすんとも言わないのを了解したものと解釈したあたしは、彼を携帯する事を勝手に決め、ランチマットを入れる袋を首に掛けられるように加工した。加工と言っても、ぶら提げた時に擦れないように紐を革の物に交換しただけであったが、出来栄えは上々であたしは気分が良くなった。

遠足の準備をしているような、不思議な昂揚感を覚えた。それは、言葉では表現し難い槐の体表面の色が引き起こしたのかもしれない。

色素では表現できない色。移ろう命の儚さを宿した色。本物の玉虫色。

あたしが槐を連れて歩こうと決めたのも、母に見つからないためではなく、高価なアクセサリーを身に着けて歩くような気持ちが湧き起こったからなのかもしれない。

――そうか。

あたしは、もう一つの宝物を見つけたのかもしれない。

銀の鍵だけじゃなく、もう一つの。

二つ目の、宝物。

――そうだ。

あたしが稔の事を調べようと思ったのも、宝物をまだ一つも見つけていない稔に後ろめたさを感じたからかもしれない。

いや、多分そうだ。

あれだけ探し求めたのに一つも見つけられずに倒れてしまった稔。

一度も欲した事がないのに、二つも見つけてしまったあたし。

一体どちらが幸せなのだろうか。

外に出た途端、まるで待ち受けていたかのように熱気がまとわりついてきた。

まだ午前中だと言うのにこんなに暑いとは。

今年はまれに見る猛暑だそうだ。

夏休みの初日にふさわしい炎天下だ。

上からは日差しがぎらぎら。

下からは地熱がむんむん。

気温計は――外を動き回る意志が萎えそうだから見ない。

ここは自転車で熱気を振り切って爽やかになるっきゃない。

よっしゃ、と意気込んで愛車を駆り、出発したまでは良かった。

まさか、たった五分走っただけでパンクするとは予想もしなかった。

我が家の近くには自転車屋がない。だからパンク修理はもっぱら家でするのだが、それも父にお任せだったのであたしは全くできない。仕方なく、あたしは愛車を近くの公園の隅に置き、徒歩で行く事にした。

　中二の夏休みといえば高校受験の準備を始める時期である。ご多分に漏れず、あたしも塾の夏期講習に参加する予定になっていた。
　だが、あたしは偏差値の高い高校に行きたいなんて少しも考えておらず、塾だの夏期講習だのに取られる時間があるならば一冊でも多く本を読みたいと思っていた。
　国語の成績が良いという一点を理由に何とか塾通いを避けていたのだが、さすがにこの時期になるとそれも通用しなくなっていた。
　したくない勉強をさせられるという憂鬱な気分の上に期末考査の一件もあって、あたしは最悪の心境で夏休みを迎えようとしていた。
　しかし、それもこれも全て稔の事故で吹っ飛んだ。
　両親――特に母がふさぎ込んでしまい、あたしの夏期講習などどこかに行ってしまったのだ。
　姉としては悲しむべきであろうが、何度も言うようにあたしは何とも思っていない。むしろ幸運だとさえ思っている。稔が倒れたお陰であたしは夏休みを取り戻す事ができたのだ。ひと月以上もの自由な時間を手に入れたのだ。稔さまさまである。
　――なのに。
　なのに、何で。
　折角の自由な時間を使って。
　あたしはこんな事をしているのだろう。
　稔の足跡をたどり、歩き回っているのだろう。
　融けてしまいそうなくらい暑い中を。
　炎天下の中を。
　弟のために。
　どうして。
　あたしはどうして。
「葉摘は、どうしてこんな事をしているのだ？」
　胸元からくぐもった声がしたが、あたしは何も答えず歩き続けた。
「何かを探しているのか？」
　声はしつこく訊ねてくる。
「手伝える事はないか？」
　あたしは何も答えなかった。声は諦めずに問い掛けてくる。
「ワタシに手伝える事があれば言って――」
「しつっこい！」
　あたしは自分の胸元に向かって大声を出した。
　言った途端に誰かに聞かれていないか気になり、周囲を見回した。
　――誰もいない。
　安心したあたしは、近くの日陰にある木製のベンチに腰かけた。
　首から提げた紐を手繰り寄せ、胸元から巾着袋を取り出す。
　口紐を緩めた袋を、ベンチの上に軽く放った。
「どうした葉摘。乱暴だぞ」
　転がった袋から声がした。
「槐がしつこいからだよ」
　袋からもぞもぞと這い出してきた槐に、あたしは苛立ちをぶつけた。
「それは違う。葉摘が不機嫌なのは暑いからだろう」
「違う」
　違くない。槐の言う通りである。あたしは茹(う)だるような暑さにギブアップ寸前だった。
「――いや、それだけではないな。葉摘は何かに悩んでいる」
「ち、違う」

　それも違くない。槐さんのおっしゃる通りである。仲良くなかった稔について調べようとしている自分が理解できなかった。
　何をしてるんだあたしは。
「まあ、話したくなければ話さずとも構わないがな」
　槐は落ち着いた口調でそう言った。まるで子ども扱いをされているようで、あたしは無性に腹が立った。
　ムシのクセに――。
「虫の癖に生意気だぞ――と思ったろう？」
　と槐が言った。
「な――どうして解ったの？」
　あたしは驚くあまり認めてしまった。
「言っただろう。ワタシは夢の世界の生き物だ、と。夢の世界の住人は心の存在。こちらの住人のように肉体に付随した擬似的な精神の思考など、手に取るように解るのだよ」
　と槐は得意げに言う。
　あたしは何も言い返せなかった。
　口じゃあ敵わない。
　悔しい――。
　くそう、どうせ心を読まれているのなら何度でも言ってやれ。
　ムシのクセにムシのクセにムシのクセに。
　ムシのクセにムシのクセにムシのクセに。
　ムシのクセにムシのクセにムシのクセに。
「何度思っても無駄だぞ。これは仮初の躯体(カラダ)とも言っただろう？　それを何と思われようと、面と向かって罵倒されようとワタシは何とも思わない」
　何だとこの野郎ぶっ飛ばしてやろうか。
　――いかんいかん。
　心を落ち着けよう。
　冷静に考えよう。
　冷静に冷静に。
　冷静に。
　……ふむ。
　落ち着いた。
　あたしは冷静な気持ちで槐を見た。
　――虫だ。
　どう見ても虫だ。
　脚が六本生えている。
　頭と胸と胴体の三つに分かれている。
　そう、槐の躯体(カラダ)は昆虫に酷似しているのだ。
　そう言えば、相馬先生が授業のマクラで昆虫採集の話をした事があった。
　しかし、話の内容はよく憶えてない。相馬先生には珍しく、生々し過ぎて面白くない話だったからだ。
　さておき、あたしは虫に詳しいわけじゃないから厳密には解らないが、槐は世間一般に言う虫の形をしているのである。
　何の虫に似ているのかと言うと、甲虫だ。特にカブトムシにそっくり。
　ずんぐりむっくりした体と頭部に縦に並んだ二本角。
　両眼の間の角が、頭頂の角より太くて長い。
　どう見てもカブトムシなのだが、違和感を覚える点が二つある。
　まず、太い方の角の先端が五つに分かれている点。
　何かの形に似ている気がするのだが、何なのかは思い出せない。

そして、カブトムシと何より違う点は体表の色である。
カブトムシといえば黒いイメージがある。また、外国の珍しい種類には黄色が混ざっていたりするのを見た記憶があるが、槐のこの色はまずないだろう。
何と、見る角度によって色が変わるのだ。
紫色にも緑色にも見える。その変色のさまが思わず見入ってしまうほど奇麗なのである。
昨日、あたしは槐と出会った朝から日が暮れるまでずっと、彼の体表を眺めていた。
一番好きな色も、もう既に見つけている。
槐の背中を真上から見た時の、透き通るような青。
これは――凄い。
思わずため息が出てしまう。
透明よりも透明で、青よりも青い。
空の青と海の青を水晶の器に閉じ込めたような青の王様。
見る角度を少し変えただけで、光の加減が少し変わっただけで移ろってしまう儚い色。
槐の偉そうな性格を差し引いても余りある美しさなのだ。
これを玉虫色と呼ぶのだろう。
玉虫色の中の玉虫色。
玉虫色の王様である。
そう言えば、相馬先生のマクラに玉虫色の話もあった。
こちらはよく覚えている。
面白い話だったからだ。
何でも――。
玉虫色とは、その名の通りタマムシという虫の体表色が語源であるそうだ。
タマムシの色は見る角度によって変わるのだが、それは色素によるものではないらしい。
タマムシの体表面は細かい構造が周期的に並んでおり、受けた光を反射する時に特定の波長を強めたり弱めたりする事によって変色するという。
タマムシの体表面構造のような結晶を作り、それを使って電球などのエネルギー効率を抑えるという研究が進められている。
その結晶構造を安価に作るために、自己組織化という雪の結晶が自分で組み上がっていく仕組みを利用する方法の実用化が考えられているという。
そこから相馬先生の話はどんどん展開し、江戸時代に雪の結晶の観察をした土井(どい)何とかという藩主の事や、夏目(なつめ)漱石(そうせき)の孫弟子の中谷(なかたに)何とかという人工雪の研究者の話がちょいちょいと織り込まれ、エントロピーが何とかと飛躍しかけたのを自制し、最終的に現代の科学ではコンペイトウの角が形成される理由は完全には解明されていないと締めくくった。
玉虫色からタマムシ。
タマムシから結晶構造。
結晶構造から自己組織化。
自己組織化から雪の結晶の研究。
そしてコンペイトウの角の話へと移り変わっていった。
はっきり言って、聞く方としては何が何だか解らない。
相馬先生に完全にぶっちぎられてしまっているのだ。
――しかし不思議な事に、話に聞き入ってしまう。
ぶっちぎられているのだが、聞いてしまう。
あたしのように小難しい単語を覚えてしまう変な奴はまず居ないだろうが、先生の話を聞いたほとんどの人間は何だか解らないがとにかく納得してしまう。何だか解らない内に、へえそうなんだと感心し、そのまま授業も聞いてしまうのだ。
授業の内容とは関係ない話なのに。

授業自体は普通なのに。
聞いてしまうのだ。
テストの平均点も高いのだ。
テストーー。
そこであたしは期末考査の一件を思い出し、少し気分が悪くなった。
いかんいかん。
体から熱が放散されたからか、思考も冷静に戻ってきた。
「ーーよっし槐くん。活動再開と行こうじゃないか」
あたしは返事を待たず、強引に槐の体を掴むと巾着袋に押し入れた。
「葉摘。いけない。これじゃ逆さまーー」
問答無用。あたしは袋の紐を首に掛け、意気揚々と立ち上がった。
ふと、小学生の頃の事が思い出された。
あの頃も、こんな風に首から提げて遊んでたな。
あれも、槐に負けないくらい奇麗だったな。
そういやあれはどうしたんだっけ。
どこにしまったんだっけ。
帰ったら探してみよう。
とっても奇麗なーー。
あのーー銀の鍵を。

五．ソリチュード

七月二十一日・木曜日・午後六時。

一日中駆けずり回ったあげく、結局何の手掛かりも見つからなかった。

クタクタになって帰宅したあたしは、シャワーを浴びて汗を流し、部屋に戻るやベッドに倒れ込んだ。

うつらうつらしながら今日一日の行動を振り返ってみた。

小うるさい槐にうんざりしながら、あたしは古い地図を頼りに何とか目的の神社に辿り着いた。着いた時には脱水症状寸前で、何をしに来たのか忘れてしまうくらいヘロヘロだった。

鳥居をくぐり、狛犬に守られた朱色の門を越えた。門はあるのに壁がないのは何か変だな、そう言えばお寺には壁があるけど神社にはないな、などと考えながら境内に入った。

参拝客は一人も居なかった。稔を発見してくれたという神主さんを探してみたが、近くの事務所のような建物を覗いても見当たらなかった。事前に連絡しておいた方が良かったかもなんて思ったが、知らない人にいきなり電話を掛けるなんて芸当は、あたしにゃ到底できません。

神主さんは後回しにして、あたしは本殿の裏に回り、稔が倒れていたという林に入った。

裏に回る際、見上げたら送電線と鉄塔が目に入り、何だか興が殺(そ)がれて微妙な気分になった。いやいや、殺がれる以前に目的はそうではないだろう、と考え直す。

林といってもそれほどたくさんの木が密集しているのではない。だが、それでも充分日差しを遮ってくれて、とても気持ち良い。

静謐(せいひつ)な空気――と言うのだろうか。木々が吐き出したばかりの清らかな空気が漂っている。清らかなのだけれども濃い。濃密な気が辺りに満ちていた。

神社に壁がない理由が何となく解った。この空気が内と外を隔てているのだ。物理的にはっきりと区分けされているのではない。つまり神社とは、地域の自然の一部なのだ――と、あたしは根拠もなく納得した。夏の自由研究のテーマは神社にしようか、なんて思った。

林の範囲はそんなに広くなかった。歩くまでもなく見渡す事ができたが、取りあえず歩き回って見る事にした。

地面を見ながら適当に歩いてみたが、見当たるのは草と土と木の根ばかり。手入れが行き届いているのだろう。ゴミはもちろん、石ころの一つも落ちていなかった。

――稔は、ここで宝物を見つけられると思ったんだろうか。

その時に稔は何を考えていたのだろうか。

――何も見つけられないまま、倒れてしまったのだろうか。

それは少しかわいそうだと思った。

小学一年からだから、足掛け六年間も探し求めていたのだ。

たかが六年と思ってはいけない。稔は十二歳。十二歳の六年間、つまり人生の半分を宝物探しに費やした事になる。二十歳の十年間、百歳の五十年間と同じ意味を持つと言っても過言ではない。

何かにそれだけの長い時間をかけた事のないあたしにとっては、その点だけに限れば、稔は尊敬に値する人間だと言える。

小一時間歩き回り、林の隅から隅を見たが手掛かりどころか稔が倒れた痕跡すら見つからなかった。

そうだよな。事故なんだから手掛かりを調べに来ても何も見つかるわけがないわな。とっとと家に帰って自由な夏を謳歌しよう。

あたしは顔を上げ、来た道を戻った。

林を出て、本殿の裏手から正面に回ると、そこに人影が見えた。後ろ姿ではあったが、着る物から察するに神主さんのようだった。

まだ、あたしに気付いてはいない。

声を掛けようか。

しかし何と言えばいいのか解らない。

あれこれ考えている内に、あたしの気配を察知したのか神主さんが振り向いた。

「お、こんにちは」
　神主さんは朗らかに微笑んだ。
　小柄なおじいさんで、白髪で眼鏡を掛けている。優しそうな人だった。
　あたしは慌てて、
「どうも」
　と応えようとしたが、実際には口の中でもごもご言っただけだった。
「あれ？」
　神主さんがあたしに近付いてきた。
　怪しまれたかも。どうしよう。上手い言い訳が思い付かない。
　いやいや。言い訳なんてする必要はないじゃないか。後ろめたい事なんてないのだから。
　でも、何て説明すればいいのだろうか。
　一昨日ここで倒れた中学生の姉です。
　弟が倒れた場所を見に来ました。
　見させてもらって良いですか？
　――何だそりゃ。余計に怪しまれるに決まっている。
「もしかして、葉摘ちゃんかい？　田島稔くんのお姉さんの」
「え。どうして――」
　知っているんですか、とあたしが訊ねると、
「稔くんがよく話をしてくれたから」
　神主さんはそう言った。
　何だって――。
　稔があたしの話をしていただって。
　それはあたしの知っている稔ではない。
　あたしはひどく混乱した。
「あ、あの、稔は――」
　あたしの事を何と話していたのですか、と訊ねようとしたのだが、
「ああ、稔くんの倒れてた場所を確認しに来たのかね。昨日掃除してしまったから判らなかったでしょう。案内しますよ」
　こっちこっち、と間違った先読みをした神主さんはあたしの反応も見ずにさっさと林の方へ行ってしまった。
　あたしは、稔があたしの事を何と話していたか聞きたかったのだが。
　勘違いではあるが、稔の倒れた場所を見に来たのが本来の目的だからいいのか。
　あたしは黙って着いて行った。
「稔くんの容態はいかがですか？」
　歩きながら神主さんが訊ねてきた。
「まだ、意識は戻っていません」
「そうですか」
　神主さんの表情が曇った。いつも通りの調子で答えたつもりだったが、抑揚が無いから落ち込んでいるように聞こえたのだろうか。
「私が初めに発見したんですがね。見つけた時は寝ているのかと思いました。でも――ほら、稔くんは歩き回りはするけれど、そこらで寝転がったりはしないでしょう？」
「はあ」
　あたしは間の抜けた声で答えた。同意を求められても困るのだ。あたしは稔が歩き回っているという話を聞いた事があるだけで、実際に見てはいない。そうらしいですね、としか言いようがない。まして寝転がるかどうかなんて知っているはずがない。
　そんなやり取りをしている内に、稔の倒れた場所に辿り着いた。
　林の外れの、何の変哲もない木である。稔はこの木の下で仰向けになって倒れていたそうだ。

「ケガもしていなかったし、息もしていたし。でも、声を掛けても揺すっても起きる気配がない。慌てて救急車を呼びました」
　神主さんは後悔の念を交じえながら言った。
　あなたが責任を感じる必要はありません。責任は全て愚弟にあるのです。むしろ、あなたのお陰で一命を取り留めたのです……などと色々思案したのだが、結局、
「ありがとうございました」
　としか言えなかった。
「いやいや。お礼を言われる事なんてしていませんよ。でも、稔くんも残念だろうね」
　神主さんの言葉に引っ掛かりを感じた。
　何が残念なのだろうか。
　若いのに倒れてしまったからだろうか。
　それとも、宝物を見つけられなかったからか。
「何が残念なんですか？」
　本当にあたしが言ったのかと思うほど、すんなりと言葉が出て来て驚いた。
　それを聞いた神主さんは怪訝そうな顔をした。
「あれ、知らないのかい？」
「稔が歩き回るのは、何かを探しているからだという事は知っています。神主さんが今残念だろうと仰ったのは、稔が探し物を見つけられなかったからですか？」
　神主さんは首を横に振った。
「稔くんは、探していた物を見つけたと――」
　何だって。
「見つけた？　な、何を見つけたんですか？」
　思わず神主さんの袖を掴んでいた。無意識の所作で、自分の体とは思えない動きだった。
「私も詳しくは知らないんだよ。見つけたと聞いただけで」
「そんな。あたし、それを調べに来たんです。あたし、弟と――稔と仲が良くなくて、ちゃんと話した事もなくて。聞きたい事もあったんです。でも、急に倒れちゃって。だから――だから知りたくて。弟が何を考えていたのか知りたいんです」
　弟が何を探していたのか知りたいんです。あたしは神主さんにすがるように言った。
「いやしかし、解らないものは解らないからなあ。こりゃあ困った」
　神主さんは白髪頭を傾げた。
「そうだ。あっちなら解るかもしれないな」
「あっち？」
「ああ。駅を挟んで向こう側にも神社があるんだ。知ってるかい？　結構大きな神社なんだけど」
　はっきりしないが、あったような気がしたので頷いた。
「稔くん、そこの神主とも仲が良くてね。私みたいなじじいと違って若いから話が合ったんじゃないかな。よく通っていたみたいだよ」
　もう一つの神社。そこに稔の宝物がある。
「そ、その神社の場所、教えて下さい」
　あたしは持ってきた地図を広げて、神主さんに場所を教えてもらった。
「えっと、駅の少し南の――ここだ。お寺の近くのこの神社」
　神主さんの指先の鳥居マークを素早くチェックすると、あたしは、
「ありがとうございました」
　あたしはお辞儀をすると身を翻(ひるがえ)し、その足でもう一つの神社に向かおうと意気込んで境内を出たのだが、
「あ」
　そこで、自転車がパンクしていた事を思い出し、やる気が急速に失せてしまった。途中でパンク自転車を回収し、ひいこら押して帰宅した。

まどろみから醒めると、日はとっぷり暮れていた。あたしは身を起こし、開きっ放しの窓を閉めた。
リビングに下りると、テーブルの上に千円札が置いてあった。これで夕食を済ませろ、という事か。
外に出るのが億劫だったので、冷蔵庫にある残り物の野菜を適当に炒め、インスタントラーメンに掛けて食べた。テレビを点けてみたが、どのチャンネルも面白くなかったので消して部屋に戻った。机に向かい、学校から借りた小説を開いてみたが集中できずに放り投げた。椅子の背もたれに体重を掛け、天井を見上げる。
――あたしは、何をしたいのだろう。
自分が何を考えているのか解らない。
どうしてだか、無性に稔と話がしたかった。
稔が倒れて意識が失くなったからだろうか。
失って初めて気付く、という感覚だろうか。
――違う。
あたしは背もたれから体を起こし、立ち上がった。
「そんなんじゃない」
そんな事じゃない。
そんな簡単に結論付けられる事じゃない。
今のあたしのこの思いは、今まで誰も感じた事のないものだ。
あたししか解らない苦しみだ。
誰とも共感できない痛みだ。
たくさんの人の中で――。
あたしは。
「あたしは独りだ」
なぜだかその瞬間、あたしは孤独の意味を理解した。
周りに誰もいない事が孤独なのではない。
周囲にたくさん人が居るのに、その誰とも通じ合えていない事こそが孤独なのだ。
「素晴らしい。その通りだ、葉摘」
カーテンの隙間から声がした。
驚いて目をやると、窓際に小さな青い物体が置いてあった。
「どこから出てきたのよ、槐」
神社に着いて以来、ずっと静かだったのですっかり忘れていた。
「ずっと、君のそばに居たぞ」
全然気付かなかった。あたし、いつ槐を袋から出したっけ。
「ところで、葉摘。君は今、とても重要な事を口にしたな」
「はあ、何の事？」
ヤブから棒に何を言うか。
「自分は独りだ――と言ったろう？」
ああ、その事か。
「それがどうしたの？」
「何だ、現実世界における存在の本質を理解したのではなかったのか？　真理に近付いたのではないのか？」
「何よ、それ」
またわけの解らない問答を吹っかけてくるつもりなのか。
「――そうか。その変わらずの間抜け面。やはり気のせいか」
槐は角を上下させた。あたしのバカさ加減に呆れているのだ。
「他人の顔の事は放っておいてよ。槐なんて表情も何もないじゃない」
「それもそうだ。なかなか巧いじゃないか、葉摘」
「そんな褒め方されても嬉しくないよ。で、あたしが何だっての？　真理って何さ？」
そう言うと、槐は急に押し黙ってしまった。

「こンのやろう」
　デコピンの一発でも食らわせてやろうかと思ったが、槐の美しい体を傷つける事はやっぱりできなかった。傷つける事どころか、触れる事さえ気が引けた。この美しい存在を今まで忘れていた自分が信じられない。
　あたしは槐との出会いを神様に感謝しつつベッドに横になった。夕方に少し寝たせいか、夜中までまんじりともせず何度も寝返りを打っていると、外でがちゃがちゃ物音がし始めた。
　何かと思って覗いてみると、父があたしの自転車を直してくれていた。
　あたしは複雑な気持ちになり、布団を被ってむりやり眠った。
　次の日起きると、父はすでに家を出ていた。
　――お礼くらい言わせてくれてもいいのに。
　そう思いながら、自転車にまたがった。

６．プレシャス・プレイス

六．プレシャス・プレイス

七月二十二日・金曜日・午前十時。

志恵(しえ)さんはドアを開け、

「どうぞ」

と、あたしをその部屋の中に誘(いざな)った。

カーテンが閉められているので、部屋の中は薄暗い。

六畳ほどの広さで、入って正面の壁に机と椅子がある。机の上には本やノートが雑然と並べられ、隅に小さなラジカセが置いてあった。左手側には寝台。右側の壁には天井に着きそうなくらいの棚があり、ぎっしりと本か何かが詰め込まれていた。

「この部屋はねえーー」

志恵さんが蛍光灯を点けながら言う。

「昔、おばさんの知り合いの子に貸していたのよ」

志恵さんは懐かしむように語る。

「知り合いの子って、じゃあーー」

稔がこの部屋を使ったのではないんですか。あたしは訊ねた。

「もちろん稔くんも使ったわよ。その知り合いの子が使わなくなってからしばらくの間、放ったらかしにしてたんだけどね」

そこで志恵さんは、ふふふと笑った。思い出し笑いのようだった。

何を思い出しているのだろうか。

知り合いの子の事か、それとも稔の事だろうか。

「稔くんに会ったのは、去年の秋だったかな」

どうやら稔の事だったようだ。

「驚いたわよう。落ち葉を掃いてたら裏の林からガサガサって音が聴こえてね。モグラかしらと思って行ってみると稔くんでーー」

志恵さんはまた、ふふふと笑った。

話を聞きながらあたしは申し訳ない気持ちで一杯になった。もうホントすいません。愚弟が何をしていたのでしょうか。

「ごめんねぇ。今思い出しても笑っちゃうわ。だって、稔くんたら落ち葉の中を泳いでるんだもの。バッサバサと、こうーー」

志恵さんはクロールの動きをしてみせた。

「はあ？」

あたしは頭上に大きな疑問符を浮かべた。

何をしているんだあいつは。宝物探しをしていたんじゃないのか。落ち葉を引っ繰り返して探しているのなら解るが、泳いでるとは一体どういう事だ。

「面白そうだからしばらく眺めてたのよ。そしたら稔くんもあたしに気付いてね。立ち話も何だからってこの部屋に呼んで話してみたらすっごい面白い子でさ。おばさん、ひと目で稔くんのコト気に入っちゃって、この部屋使ってもいいよって言ったのよ。そしたら稔くんもこの部屋を好きになってくれたみたいでねーー」

そんなこんなで、稔はこの部屋にちょくちょく通うようになったそうだ。

稔がそんな事をしていたなんて、と思いつつ部屋を見渡した。よく見えなかった右側の棚の中身が明かりのお陰で見えた。

中に詰まっているのは、本ではなかった。

あたしは手を伸ばし、それの一つ取り出した。掌に少し余るくらいの大きさで、透明のプラスチックのケースに入っていて、中身には二つの穴が開いているのが透けて見えた。日付が書かれたシールが貼られている。日付は六年前の八月二日だった。

「これって、カセットテープ……ですか？」
　志恵さんはそうよと頷いた。
　棚はカセットテープで一杯だった。
　一体何本あるのだろうか。一段ごとに、横に三十本並び、縦に三本詰まれているから九十本。それが四段だから単純に考えて三百六十本にもなる。そんな量のカセットテープなんて、あたしは生まれてこの方見た事がなかった。
「こんなにたくさんのカセット、見た事ないでしょ？　あ、もしかしてカセット自体初めて見たとか？」
「はい。あ、いやカセットは見た事ありますけど」
「そうよねえ。今の若い人はＭＤよね」
　志恵さんはそう言い、ふふふと笑った。三度目の微笑み。
　あたしは音楽を聴かないのでＭＤなんて使った事ありません。それに、今はパソコンに曲を読み込めますよ。
　ーーと思ったが、言っても仕方ない事なので言わなかった。
　この状況を遡って説明しよう。
　あたしは槐を連れ、父さんが直した自転車に乗って昨日聞いた神社にやって来た。
　思ったよりも小さな神社で、祀られているのはイザナギとイザナミとあった。そんなに有名な神様がこんな所に祀られていいのだろうか。きっとのれん分けのようなもので、大きな神社から分かれたのだろう、とあたしは思った。
　五十段もない石段をひいこら言って上がり終えると、鳥居の向こうに睦月(むつき)志恵さんが居た。
　彼女は昨日教えてもらった市内のもう一つの神社を管理している人なのだそうだ。何と呼べば良いのだろうか。神主さんか、女性だから巫女さんなのか。それとも女神主という職名があるのだろうか。そもそも志恵さんの格好はＴシャツにジーンズなのである。神主も巫女もこんな格好はしないだろう。
　志恵さんはヘロヘロのあたしを見つけるや、社務所に入れて休ませてくれた。昨日の神主さんが連絡していてくれたらしく、口下手なあたしが無理に喋らなくても大方の事情は察してくれた。本当にありがたい。人の優しさを実感した二日間である。
　志恵さんは奇麗な人だ。驚く事に彼女は母と同じ歳だと言う。どう見ても三十代前半にしか見えない。自分の事をおばさんだと言ったりしているが、だったらあたしの母は何になってしまうのだろうか。
　男の子が一人居ると聞き、どこの中学かを訊ねると、
「もうとっくに成人してるのよ」
　ふふふ、と笑った。
　成人って、ええとーー。
　驚きのあまり、思わず逆算してしまった。二十歳そこそこで子どもを産んだという事になるのか。ダンナさんいい女捕まえたなあ、と思った。
　ーーって、何考えてんだあたしは。おっさんか。
　稔の事を訊ねると、
「話すより見せた方が早いわね」
　志恵さんはそう言い、社務所の裏に案内してくれた。そこには、工事現場の休憩所のようなプレハブ小屋があった。
　それが、この部屋である。
「このカセットは、稔の物なんですか？」
　テープを棚に戻しながら訊ねた。
「いいえ違うわ。ほとんどは前の子の物よ」
　志恵さんは窓際のラジカセに積もったホコリを払った。見るからに古い型の黒いＣＤラジカセだった。
「ほとんどって事は、弟の物もあるんですね？」
「ええ。その棚の一番上ーー途中からカセットの色が違うでしょ？」
　志恵さんの指差す先に目をやると、確かに最上段の半ばから左端までのカセットの色が他の物と異なっていた。棚のカセットのほとんどは濃紺なのだが、そこだけ透明な青色だった。
　あたしは背伸びをして一番左端の青いカセットを取った。
　日付を見ると、今年の七月十一日。先週の月曜日だ。
「稔くんがそれを持って来た時、おばさん居なくてね」

志恵さんが呟いた。後悔の念の交じった寂しい言葉だった。
「そうですか」
それしか言えなかった。
そして、あたしは憤(いきどお)った。
こんなに素敵な人を悲しませるなんて、本当にどうしようもない弟だ。
ちゃんと戻って来て、元気な顔を見せなきゃ駄目だ。
あたしは、稔が倒れた理由を見つける決意を強くした。
「その日――稔が最後にここに来たのは何日ですか？」
「ええ、十七日よ。稔くんは必ず毎週日曜の午前中に来てたから」
「日曜……ですか」
弟の行動にあたしは全く気付いていなかった。ここ数年間、休日に稔が朝から出掛けるのは当たり前の事だった。
「このカセットには何が録音されているんですか？」
あたしがそう訊ねると、志恵さんはうーんと唸って首を傾げた。
「言っていいのかしら」
どういう事だろうか。このカセットには、口にできない物が録音されているという事か。エッチなビデオなら知っているが、エッチなカセットテープなんてあるのだろうか。
「いやだ。イヤラシイ物じゃないわよ」
志恵さんは笑いながらあたしの肩をポン、と叩いた。思考が顔に出ていたのだろうか。あたしは思わず赤面してしまった。
「――まあ、稔くんのお姉さんだから教えてもいいわよね。そのカセットテープにはね、ラジオ番組が録音されてるのよ」
「ラジオ……ですか？」
「うん。それもくだらないＡＭの深夜放送――」
同じ番組を毎週欠かさず録音してたのよ。志恵さんは呆れ顔で言った。
稔がラジオを好きだという事は知っていたが、録音までしていたとは。
何度か部屋に忍び込んだ事があるが、録音されたテープなんて見かけた覚えはない。
それにしても、毎週同じ番組を録音して四百本近くあるという事は、だ。一年間を五十週間として、四百割る五十の――。
「は、八年分ですか」
開いた口が塞がらなかった。
「八年って言っても稔くんが録(と)った分は一年分もないし、前の子がこの部屋を使わなくなってからの二年分はないのよ」
それでも凄い。前の人も凄いし、稔も凄い。
一つの事をそんなに長く続ける意志なんてあたしにはない。惰性でやっていたとしても、それはそれで凄い。さすがは六年間も宝物探しを続けた男だ。
――宝物探し。
毎週日曜日に稔が出掛けるのを、あたしは宝物探しに行っているのだと思い込んでいたが、事実はそうでなかった。
稔は頻繁にこの部屋に通い、古いテープを持って帰って聴いたりしていたのだろう。
宝物探しをしているのだろうと思っていた時間には、この部屋に来て――。
そうか。
これが稔の――。
「宝物だったのか」
稔が見つけていたという宝物。
それはこの録音されたテープ、いや、この部屋も込みで宝物なのかもしれない。
いずれにせよ、稔は宝物を見つけていた。
稔の宝物探しはとっくに終わっていたのだ。

――じゃあ。
じゃあ、どうして倒れた時、稔は向こうの神社の林なんかにいたのだろう。
単に散歩が習慣となっていたからだろうか。
その可能性もないとは言えない。
でも、本当にそうなのか？
「――ちゃん。葉摘ちゃん？」
呼び掛けられ、あたしは我に返った。
「どうさいたの、いきなり黙ったりして。まだ疲れてる？」
志恵さんが心配そうにあたしの顔を覗き込んだ。
「あ――いえ、大丈夫です。ちょっと考え事をしてしまって」
あたしは慌てて平静を装った。
「ならいいんだけど」
志恵さんはそう言うと椅子に座り、あたしに寝台に腰かけるよう勧めた。あたしは勧められるがまま寝台に座った。硬くてひんやりしていて気持ちが良かった。この部屋がよく利用されていた時は布団が置いてあったのだろうが、今は台しかない。
「――そうだ」
志恵さんは何かを思い出したように手を叩き、机の上に並んでいるノートの一冊を手に取った。
「何ですか、それ」
あたしが訊ねると、志恵さんは含み笑いをした。
「ふふふ。日記よ、日記」
「日記って、まさか――」
「そう。稔くんの日記よ。葉摘ちゃんは稔くんの事を調べてるんでしょ？　これを読めばヒントになるんじゃないかしら。――あ、もちろんあたしは読んでないわよ。稔くんのだって確認しただけ」
子どものプライバシーは尊重する主義なのよん、と志恵さんはおどけた。
この人は、稔を自分の子どものように思ってくれている。血を分けた子どものように考えてくれている。愛してくれている。多分、前にこの部屋を使っていたという人の事も、同じ様に大切に思っていたのだろう。
稔が――うらやましい。
あたしもそうなりたいと思った。
この人に愛されたら、どんなに嬉しいだろうか。
あたしも愛されたいと思った。
「あ、あの、その日記……」
あたしは必死に口を動かした。
「いいわよ、貸したげる。ハイ」
志恵さんは日記をあたしに差し出した。あたしは受け取りつつ、図々しい事を企んでいた。
「あ、あの――」
「なあに？」
「もし良かったら、この部屋を……」
あたしは一生懸命言葉を出そうとした。いや、半分は言いづらそうに見せる演技だったかもしれない。
「ああ」
志恵さんは得心したように手を叩いた。
「この部屋ね。ええ、使ってもいいわよ。葉摘ちゃんの好きなように使っていいわ」
ハイこれ鍵ね、といとも簡単に今日会ったばかりの小娘にこの部屋の鍵を渡した。
「え――いいんですか？」
あたしはそう言いつつも、遠慮がちに鍵を受け取った。白々しい演技である。
「気にしなくていいのよ」
どうぞごゆっくり――志恵さんはそう言い残すと社務所へ戻って行った。

　あたしはため息を吐いた。おかしな満足感で頭が一杯で、脳髄が痺れているような感じがする。
　右手には稔の日記。左手にはこの部屋の鍵。二つも手に入れてしまった。
　あたしって、結構色んな物を手に入れているなあ。日記や部屋だけじゃなくて、あの銀の鍵も、考えようによっては槐もだ。
　欲しいと強く願った事はない。そこまで考えなくとも手に入ったし、全く欲しいとは思わなかった物が手に入ったりもする。槐に至っては想像すらしていない生物である。
　そう言えば――。
「おい。起きてるか」
　この神社に来てから槐が黙りっ放しなのだ。あたしは首から提げた紐を引っ張って袋を揺さ振った。
「おいコラ。槐やい」
　全く反応がない。ぴくりとも動かなかった。
　あたしは袋の口を緩め、机の上に引っ繰り返した。中の槐が机上にコロンと転がり仰向けになった。六本の脚は折りたたまれて身体の内側に収納されている。
「生きてるか？」
　指先でつついてみるも反応なし。つまんで腹這いの状態にしてやるが、全く動かなかった。
　普通ならここで、どうしたのだいじょうぶ、と騒ぐのだろう。しかしあたしは普通ではないので騒ぎはしない。
　あたしにとって重要なのは、槐の奇麗な体なのだ。それさえ無事なら中身がどうなっても知ったこっちゃないのだ。
　そもそも、槐自身が躯体(カラダ)は仮初だと言っていたのである。
　あたしは槐の体を袋にしまい、興味を稔の日記へと移した。

七．フェノメノン

八月十日・水曜日・午前八時。

相変わらず、稔の意識は戻らない。

今日は登校日だったので、三週間振りに制服に袖を通した。

家から出ると相変わらずの猛暑であるが、毎日同じような暑さの中を移動しているのでいつの間にか慣れてしまった。

志恵さんと出会った日からほぼ毎日、あたしはあの部屋に通い続けている。

あたしは冷房のないあの部屋で扇風機を友とし、毎日稔の日記を読んでいた。それでも神社の林――鎮守の森と言うのだと志恵さんに教えてもらった――の静謐で清涼な空気のお陰で、アスファルトの上にいるよりはよっぽどマシなのである。

汗をかく事は大切だと思った。冷房に慣れ過ぎていたからか、あたしは汗をかき難い体質になっていた。汗が出ないという事は熱が体の外に放散されないという事である。そのため、あたしは夏になる度にへばっていた。

しかし一週間もあの部屋に通っていると、あたしの歪(ゆが)んだ体質も改善されてきたようで、滝のように汗をかくようになった。今では脱水症状が怖くて飲料を持ち歩くほどである。

太陽の下を頻繁に移動したので、日焼けもした。小麦色とは呼べないが、元々の青白さと比べれば人並みになった。

あたしはあの部屋を拠点に調査を進めている。

調査と言っても日記に書いてある場所に行ってみるという程度だが、それでも稔についての情報がたくさん得られた。

稔が市内のあちこちに足を運んでいた事は知っていたが、行く先々で良い評判ばかり聞くので驚いた。珍奇な奴だと思われているものと決め付けていたからだ。

稔は神社だけでなく、お寺の住職さんや広い庭のある大きな家に住むおばあさん、潰れかけの精肉店のおじさんなど、たくさんの人たちと親交があった。公園や駅の周辺で暮らす自由な人達と仲が良いと知った時には、あたしは稔に尊敬の念をすら覚えた。

しかしそれよりも驚いたのは、人と話すのが苦手だと思い込んでいた自分が今挙げた全ての人と普通に会話できたという事だ。住職さんやおばあさんとの茶飲み話だけでなく、公園の自由な人達とも普通に会話する事ができた。

――とは言え、稔が開拓した人脈に乗っかっただけなのだが、それでも自分にここまでの会話能力があるというのは驚きだった。

健康な体と社交性。

まるで普通の人間じゃないか。

生まれ変わったような気分だった。

全ては稔が倒れてからだ。

槐と出会ったのも。

志恵さんと知り合えたのも。

あの部屋の鍵をもらったのも。

全ては稔が倒れた七月十九日――。

あたしの十四歳の誕生日からの出来事だ。

――いや違う。

全てではない。

あたしは何かを忘れている。

とても大事な――。

全ての始まりはそこだ。

どうしても思い出せない。

何だったっけ――。

駄目だ、思い出せない。

　そこで教室のドアが開いた。
「あれ？　相馬じゃん」
　入ってきた教師を見て隣の男子がそう言った。
　相馬先生が教卓の前に立つと、ざわめきが波状となって教室に広がって行った。本来なら、そこにはこのクラスの担任である広瀬(ひろせ)という数学教師が立っているはずだからだ。
「広瀬先生はどうしたんですか？」
　ある女子が訊ねた。
「広瀬先生は御実家に不幸があったそうで、今日はいらしていません。なので、副担任の僕が来ました」
　相馬先生は淡々とした口調でそう言った。
「えー。相馬って副担(フクタン)だったの？」
　という声がところどころで起こる。
　相馬先生はまあね、とまともに相手をせず、淡々とした口調のまま出席を取り始めた。
「青木さん」
「はい」
「井上くん」
「へい」
　久し振りに相馬先生を見たなあ、と思った。あれだけ好きだったのに、夏休みが始まってから相馬先生の事なんてほとんど考えてなかった。
「加賀山くん」
「うーい」
「工藤くん」
「はいはい」
　あたしの番が近付いてくる。相馬先生は生まれ変わったあたしを見て、なんて思うだろうか。そう考えると気持ちが昂揚してきた。
「園田さん」
「はい」
　次だ。
「田島さん」
「はい」
「千野くん」
「うす」
　何事もなく、点呼は続けられた。
　――ま、そりゃそうだわな。
　相馬さん変わったね、なんてわざわざ点呼を止めて言うわけがないじゃないか。どこのキザ野郎だって話だ。
　そもそも、相馬先生があたしの変化に気付いているわけがないじゃないか。向こうは一人でこっちは一学級三十人だぞ。教師と子どもが一日中一緒にいる小学校ならまだしも、教科で教師が変わる中学校なのだ。担任でもなく臨時の副担任なのだ。解るわけがない。
「渡辺さん」
「はい」
　あたしがそんな事を考えている内に出席確認の点呼は終わった。相馬先生は出席簿をパタンと閉じ、教卓に置いた。
　先生は顔を上げて話を始めようと口を開けたが、何か思い出した様子で、
「――あ、田島さんは集会が終わったら職員室に来るように」
　と言った。
「はあ」
　ぽかんと口を開けていたあたしは、間の抜けた返答をした。
　教室中が一瞬沈黙し、一拍置いて笑いが湧き起こる。

　恥ずかしくて、顔が真っ赤になるのが解った。しまった、完全に気が抜けていた。
「はいはい静かにね」
　相馬先生が幼児に言い聞かすようにそう言うと、教室はすぐに静かになった。みんな、相馬先生がいつものように話をするのを期待しているのだ。
「悪いんだけど、今日は無駄話する時間がないんだ。全校集会だからすぐに体育館に移動して下さい。そのまま解散だから荷物も持って出てね。――はい廊下に並びましょう」
「えー」
「何でー」
　先生が聞く耳持たずに教室のドアを開け、廊下に出るように促(うなが)すと、みんなブー垂れながらも席を立った。
　全校集会は、夏の生活態度についてお説教じみた注意がされただけだった。
　集会が終わると、あたしは相馬先生に言われた通りに職員室に向かった。
　再び湧き上がった昂揚感をドアの前で鎮め、ノックをした。
「失礼します」
　中に入り、相馬先生の姿を探した。
　――いない。昼食時だからか、職員室には数人の教師しか居なかった。
「どうしたの？」
　デクの坊のように突っ立っているあたしに、美術の岡部(おかべ)先生が声を掛けてきた。岡部先生は若い女性教師で、男女問わずファンが少なからずいるらしい。
「どの先生にご用なの？」
「あの、相馬先生に呼ばれたんですけれど」
「相馬先生ね。えーと、あなたは確か――」
　二年の田島です、と答えようとすると、
「おっ居た居た」
　と職員室の奥の方で声が上がった。声のした方を見るとそこには見覚えのある男の人が手を振っていた。相馬先生ではない。ええと誰だったっけ。
「田島さん、こっちこっち」
　男は手招きをしながら近付いて来る。行けばいいのか待てばいいのかどっちなんだ。
「――原田さん」
　あたしは何とかその男性の名を思い出した。稔が倒れた日に事情を聴きに来た若い刑事だ。
「憶えていてくれたんだ。嬉しいね」
　学校に何か用があるのだろうか。生徒の誰かが不良な事をしでかしたのだろうか。
「ちょっと、君に聞きたい事があってね」
「え？」
　原田の用事はあたしにあるようだった。
「いやあ、稔くんの話を聴こうと、さっきお宅に伺ったんだけどね。お母さん、まだ――」
　原田はそこで言葉を濁した。
　話にならなかったのだろう。母はまだふさぎ込んでいるのだ。父も仕事ばかりで子どもの事など気に掛けやしない。
　それで、あたしの所に来たという事か。
　相馬先生と二人で話せると思ったのに。あたしはしたたかにがっかりした。職員室に呼ばれたのは、相馬先生があたしに用事があるのではなく、原田が来るからだったのだ。
「――で、何を聴きたいんですか？」
「んー。立ち話も何だから――あ、先生。そこのソファお借りしてもよろしいですか？」
　原田が愛想良く頼むと、岡部先生は頬を赤らめながら諒解した。
　原田はなかなか整った顔をしている。日頃ハナタレ中学生ばかり相手にしている岡部先生には刺激が強かったのだろうか。
　腰を下ろすなり、原田は話を切り出した。

「実は昨日、散歩中に急に倒れて病院に搬送された人が出たんだ」
「はあ」
　あたしの気の抜けた返事を意にも介さず、原田は話を続けた。
「それがね。そっくりなんだよ。倒れた状況や病院に担ぎ込まれた後の様子が――」
　原田はそこで言葉を止めた。気を遣ったのだろうか。そこまで話して気遣いも何もないだろう。
「稔が倒れた時と似ている――という事ですか？」
　あたしは原田の話を接(つ)いだ。
「構いません。続けて下さい」
「若いのに気丈なんだね。立派だよ」
　何が気丈なものか。立派でも何でもない。
「まだ事件とは決まってないから詳しい事は言えないんだけどね。昨日の晩、九頭竜(くずりゅう)公園の林の中で高校生の女の子が倒れているのが見つかったんだ。体に大きな傷はないし、検査しても全く異常がない」
　まるで眠っているようだった、と原田は言った。
　栄養を与え続けていれば生きている状態。
　――稔と同じである。
　生きている状態と言えるのだろうか。見舞いに行く度にあたしはそう思い、帰ってから槐と命についての論議を何度も交わした。
　槐は、眠ったままの状態でも生きている事には変わりないと言う。むしろ心は邪魔な物だとすら言う。心は夢の世界のものであって、この現実世界には不必要だと言うのだ。
　更に、生命は無意味で無価値な概念であるそうだ。
　生命とは、複雑に結合した物質が活動をしている状態を指すのだ、と槐は言う。
　修飾語を取り払えば、生命は状態という単語に収束される。生命をある一つの状態として捉えれば、生死は水が氷になったり水蒸気になったり、土が泥になったり砂になったりするのと変わりがないという事だ。
　大自然だの大宇宙だのと大きく括ってしまえば、生命なんてモノは取るに足らない単なる一つの状態なのだ。
　無常観に近い考え方である――あたしはそう理解した。
「何だか、変わったねえ」
　あたしの顔を見ながら原田が呟いた。
「そうですか？」
「うん。病院で会った時は何となく不安定な印象を感じたけど――おどおどしたり、無愛想だったりしてて」
　でも、今は凄く安定しているように見える、と原田は言った。面と向かって相手を褒めるなんて、この人は根が正直な人なんだなあ、とあたしは思った。
「ありがとうございます」
　と言いながら、ああ同じ事を相馬先生に言われたら天にも昇る気持ちになるんだろうなあ、と心の中でため息を吐いた。我ながら、ない物ねだりにもほどがある。
「それで、何を知りしたいんですか」
　早く話を切り上げたかった。今日もあの部屋に行かなければいけないのだ。
「ああごめんごめん。話がすぐ横道にそれるってよく言われるんだ。――で、だ。この間、病院でお母さんから伺った話の中で一つだけ、どうしても腑に落ちないところがあってね」
「何についてですか」
「うん。その、稔くんの趣味についてなんだ。散歩というか――弟さん、市内の色々な場所に行っていただろう？」
　ああ、宝物探しの事か。
「稔は、宝物を探していたんだと思います」
「宝物ぉ？」
　原田は声を裏返した。
　面倒くさいなあと思いつつ、あたしは稔の放浪癖(ヘキ)について手短に語った。
　原田は明らかに理解できないという顔をしながら手帳にペンを走らせた。

ま、そりゃそうだ。普通の感覚で生きている人間には想像もできない珍奇な行動だろうから。
「ーー時間を取って済まなかった。協力してくれてありがとう。参考になったよ」
そう言いながら、原田は席を立った。腑が落ちるどころか余計に上がってしまったという顔をしている。
「いえ。また何かあったら聞きに来てください」
あたしはわざと大人のような口振りで言った。
「帰るなら、お宅まで車で送ろうか」
原田が気を遣ってくれたが、あたしは自然な笑顔を作って丁重に断った。
「じゃあ玄関まで一緒に行こう」
原田が職員室のドアを開けようとすると、廊下から入って来ようとする人がいた。相馬先生だった。
「あ、すいません」
原田が半身(はんみ)になって道を空けると、相馬先生も同じく半身で職員室に入る。
相馬先生はあっさりとあたしの目の前を通り過ぎてしまった。
あたしは声を掛けるタイミングを逃した事を激しく後悔した。
とっとと帰ろう。そう思って前を向くと、原田が相馬先生の背中を目で追っている。
「ーーもしかして、相馬じゃないか？」
原田が声を掛けると、相馬先生はぎょっとした顔で振り返った。
「ああやっぱり相馬だ。相馬一臣だろ、君」
原田はあたしを押し退けて相馬先生に近付いて行った。
「忘れたのか？　一中(イッチュー)の原田だよ、原田(はらだ)良輔(りょうすけ)。三年の時に一緒のクラスだったろ？」
まくし立てる原田に、相馬先生はああとかうんとか曖昧な反応をしている。
「そうか、君はまだ居たんだな。みんなこの市(まち)から出て行っちまったのかと思って正直寂しかったんだよ。いやあ嬉しいなあ」
原田は手帳に何かを書き付けると、そのページを破って相馬先生に強引に手渡した。おそらく連絡先だろう。
「積もる話はあるけどさ、今日はちょっと忙しいんだ。今度連絡くれよ。一杯やろうぜ」
相馬先生は歯切れの悪い受け答えをしていたが、原田はそれを気にもせず、
「じゃ、またな」
と言ってあたしの所に戻って来た。
「待たせてごめん。じゃあ行こうか」
さっさと玄関に向かおうとする原田。
「あ、あのーー」
あたしは思わず呼び止めてしまった。
「ん？　どうしたの？」
「あの、相馬先生とお知り合いなんですか？」
「んー、まあね。中学の時の同級生なんだ。一中のーー」
そこで原田はしげしげとあたしの顔を眺め、ほほうそういう事ね、とにやにやした。あたしが相馬先生に好意を抱いているのを見透かされたようだ。
「相馬センセイの話、聞きたい？」
あたしはこくりと頷いた。
「じゃあ、やっぱり家まで送るよ。車の中で話そう」
送ってもらう事になり、校舎裏の駐車場に着いて行った。
「相馬とはね、まあぶっちゃけちまうとそんなに仲が良かったってわけじゃないんだ」
原田は車を発進させながら話し始めた。
「本当にただの同級生でさ。俺は運動部であいつは文化系だったから、ろくに話した事もなかったな。大人しい奴でね。同級生で仲良くしてるのはいなかったんじゃないかな」
車が裏門から出た。
「同級生でーーって、上級生と仲が良かったって事ですか？」

「いや、その逆。下級生とよく一緒に居たみたいだったね。つってもリーダー格って感じでもなかったな」
「どんな事してました？」
「さてねえ。俺は部活ばっかやってたから、ほとんどは人から聞いた話なんだよね」
　そこで原田は言葉を止め、うーんと唸った。
「どうしたんですか？」
「いや、相馬の事だけじゃないんだけどさ。その頃の――十年前の記憶って、何でか曖昧なんだよなあ」
「曖昧？」
「ああ。同窓会なんかで集まっても、みんなその頃の事をはっきりと覚えてないんだよね」
「高校受験で頭が一杯だったとか？」
「いやあ、それはないかな。今はどうだか知らないけど、その頃の一中は進学校じゃなかったし。専門学校に行ったり就職したりした連中も結構多かったんだ」
　どうしてだろうなあ、と原田は呟いた。
「思春期だから――ですかね」
「思春期真っ只中の君が言うなよ」
　あはは、と原田は笑った。
「あ、そう言えば――っと」
　赤信号に気付き、原田はブレーキを掛けた。車体がぐっと揺れる。
「あの頃、変な噂が多かったな」
「噂――ですか？」
「うん。都市伝説っていうのかねえ。赤マントの男とか紫鏡(むらさきかがみ)とか、知ってる？」
「知りません」
「そりゃそうだ。俺もよく知らないもの」
　何だそりゃ。あたしは眉をひそめた。
　信号が青に変わり、車が再発進した。
「都市伝説なら何となく解ります。どんな噂だったんですか？」
「それが、今聞いたら爆笑ものの話なんだけどさ。――バケモンが現れたんだと」
「化け物？」
「そう。市内のあちこちで目撃されたらしい。まあ物的証拠は何もないんだけどね。足跡もなかったってさ」
「どんな噂だったんですか？」
「ええと、話にもパターンが何種類かあってね。俺も実際に見てないからよく解らないけど確か、吸血鬼に狼男だろ――」
　原田は指を折って数え始めた。
「悪魔に天使ってのもあったな」
「外国の物ばっかですね」
「ん。言われてみればそうだ。あとは――そうだ」
　ムシだ――と原田が言うのを聞き、どきりとした。
「アリとかハチとかの虫ね。この話が一番怖かったなあ」
　まさか、槐の話じゃないだろうな。
「ど、どんな話だったんですか？」
「うーんと、ちょうど今くらいの季節かな。真夏の話でね。夜中に公園なんかをとぼとぼと歩いていると、虫の音に交じってどこからともなくおかしな音色が聴こえてくるんだそうだ」
「おかしな音色？」
「笛みたいな音色が響いたんだってさ。オカリナだったっけかな。いやフルートか？　誰かが練習してるのかななんて思いながら歩いてると、いつの間にかうるさかった虫の音がなくなっていて、笛の音色だけが聴こえてるのに気が付く」
　どうやら槐ではないらしい。それもそうだ。槐が放つのは音色ではなく理屈だもの。

　しかし、確かに奇妙な話ではある。
「おかしいな、と気持ち悪くなってきて早足で帰ろうとするんだけど、笛の音色はどこまでも着いて来る。ほら、音って近付いたり離れたりすると変化して聴こえるだろ。それがないんだ。その内に頭がおかしくなったように思えてくる。音色が耳からじゃなくて体中から聴こえてくるような錯覚に陥ってしまう」
「それで、その人はどうなったんですか？　まさか死ーー」
「いやいや死んじゃいない。それで死んじゃってたら、この話をし始めたのは誰だって事になっちゃうよ」
　言われてみればそうだ。
「でもねーーその人は最後に恐ろしいモノを見たらしい」
「恐ろしいモノ？　何を見たんですか？」
「ーーゾンビだよ」
　人間の死体が動いてたんだって。原田は神妙な顔をして言った。
「それも一体だけじゃなくて何十体もの死体が、まるでその奇妙な笛の音に操られるかのように歩いてたんだと。そして、そのゾンビの集団の頭上にーー真っ白い虫が飛んでいた」
　白いのならば槐ではない。しかしーー。
「どんな虫だったんですか？」
「さあ。俺が見たわけじゃないからなあ。でも、飛ぶ虫っつーくらいだからトンボか何かじゃないかな。音を出すって所を考えると、季節的にはセミか」
「季節で考えるならーー甲虫って可能性はないですか？」
「甲虫って、クワガタとか？」
「ええ。クワガタとかーー」
　カブトムシとか。あたしはその単語を恐る恐る口に出した。
「どっちも音は出さないから違うんじゃないか。ま、俺が見たわけじゃないから何とも言えないけど」
　根拠は全くないが、おそらく槐の仲間の仕業なのだろう、とあたしは思った。
「それで、その後はどうなったんですか？」
「どうもこうもないね。これで終わり」
　ずいぶんと尻切れトンボな話である。
「そりゃそうだって。ゾンビが大量発生してもしこの市(まち)が滅びてたら、俺達が今こうして話してなんかいられないでしょ」
　それはそうである。
「虫と言えばーー」
　原田は何か思い出したらしく、話を続けた。
　まだ話すのかと思いつつ、虫という言葉に引っ掛かったので最後まで聞く事にした。
「こないだ、東公園にセミやカナブンの死骸がたくさん落ちてたって生活安全課が言ってたな。知ってる？」
　そんな事があったのか。
「いいえ。それっていつですか？」
「えーとねーーああそうだ。病院で君と会った日だ。病院から署に戻って聞いた話だから」
「イタズラだったんですか？」
「原因は解らなかったらしいよ。変な薬が撒かれたんじゃないか何て騒ぎになりかけたけど、調べても特に何も検出されなかったみたいだし」
　これも槐は関係なさそうだった。
　しかし、どうも釈然としない気分なのはどうしてだろう。ざわめきが止まらない。
「ーーさて。とっくに君の家の前に着いてるんだけど、どうする？」
　原田がハンドルから手を離す。
　外を見ると、すぐ目の前に我が家があった。
「公僕としては、車で女子中学生と二人っきりでお喋りしてる姿を見られて、変な噂を立てられるとちょっと困るんだけど」

「あっ、すいませんでした」
　あたしは慌ててシートベルトを外す。
「どうもありがとうございました」
「いえいえ。弟さん、早く良くなるといいね。困った事があったらここに連絡してよ」
　さっき相馬先生にしたように連絡先を書いた手帳の切れ端を渡すと、原田は車を発進させた。
　結局、相馬先生の話はろくに聞けなかった。
　――でも。
もっと重大な事を聞いたのかもしれない。
　十年前のこの市(まち)に蔓延していた都市伝説。
　笛の音色と動く死体と――。
　それを操る白い虫。
　言い表し様のない不安が胸を過(よ)ぎる。
　何かが起こる。
　何となくそう思い、空を見上げた。
　あまりにも青くて――。
　目が眩んだ。

八．ハンター

八月十五日・月曜日・午前十時。

気付くと、長い夏休みもひと月弱が消化され、残すところあと二週間と少しとなっていた。

全く手を付けていない宿題や課題にもそろそろ取り組まなければいけない。そう心の隅で考えながらも、あたしは相変わらず稔の調査を続けていた。

そして、ようやく手がかりになりそうな情報を見つけた。

日記の最も新しいページ――つまり最後にこの部屋に来た七月十七日の日付にこう書かれていた。

「明日、とうとうこの部屋の持ち主に会える」

持ち主とは、志恵さんの息子の知り合いという人物だろう。

その人物について志恵さんに訊ねてみたが、はぐらかされてしまい、息子さんの友達だったという情報以外は得られなかった。この部屋に残された物を探ってみても、その人の名前はおろか性別すら判らなかった。

しかし、稔はどうやってかその人を捜し当てた。実際に会ってはないようだったが、どうやら連絡を取る事には成功していたらしい。

その人と会う日に、稔は倒れた。

これは、稔が倒れた事の事件性を導き出す証拠となるのではないだろうか。

警察に届け出るか否か、あたしはここ二、三日決めかねている。

届け出ると警察が動く。そうすれば、あたしが一人で動くよりも早く真相に近付くだろうし、この部屋の主の事もすぐに判るだろう。

しかし、そうなるとあたしがこの部屋を使う事はできなくなる。あたしはもちろん、志恵さんも事情を聴かれたりするだろう。

やはり止めだ。警察には届けない。

そんな事になったら、折角の自由な夏休みが台無しになってしまうじゃないか。

あたし一人で調査を進めるのだ。

まずこの部屋の主を探し出そう。志恵さんに聞くのが一番早いが、ここ数日間彼女の姿を見ていなかった。

よく考えると、あたしはまだ彼女がどこに住んでいるのか知らない。彼女に会いたかったら、神社かこの部屋でひたすら待つしかないのだ。

取りあえず、もう一度稔が倒れた神社に行ってみようと考えている。あの日、稔と同じ時間帯に来た参拝客はいなかったか、神主さんに聞いてみるのだ。

それと並行して日記を分析したりこの部屋をもっと調べたりしよう。まだ見逃している事柄があるかもしれない。

「よし、やるぞ」

気合を入れ直し、あたしは机上に日記を開いた。

――その時である。

がちゃがちゃ。

背後から乱暴な音が聞こえた。

あたしがとっさに振り向くと、部屋のドアノブがぐるぐると回ったり戻ったりしている。誰かが外側から回しているのだ。

志恵さんだろうか。いや、志恵さんは合鍵を持っているし、必ず二回ノックした後に声を掛けてくるはずだ。

ここは神社の境内だから参拝客がずかずかと入り込んできたのかもしれない。

がちゃがちゃ。

もう一度ドアノブが回された。

やはり志恵さんではない。もしかしたら変質者かもしれない。あたしは息を殺してやり過ごそうと、部屋の隅にしゃがみこんだ。

じゃらじゃらという音。

鍵の束を出したようだった。

ぐっぐっ、と鍵を鍵穴に押し付ける音。
ごりごり。
鍵が合わなかったらしい。
もう一度じゃらじゃら。
ぐっぐっ。
ごりごり。
二つ目の鍵も違ったようである。
来訪者はそれでも諦めず、持っている鍵を差し込もうと何度も試みた。
一体誰なのだろうか。
ここまでしつこいのは常軌を逸してはいないか。
じゃらじゃら。
――待てよ。持っている鍵が合うかどうか実行する人間は、あと一種類考えられる。
それは、この部屋の鍵を持っていた事のある人間だ。つまりこの部屋を使っていた二人。志恵さんの息子さんの知り合いと――。
まさか――。
心がざわつき出した。
ぐっぐっ。
あたしは立ち上がった。
まさか、稔の意識が戻ったのか。
ざわめくあたしの心に、期待と不安が混交する。
稔の意識が戻ったのだとすれば、それは喜ばしい事である。あたしの中に凝り固まっていた稔へのわだかまりはいつの間にかなくなっていた。話してみたい事すら思い付いている。
ぐぐっ。
鍵が差し込まれた。
――しかし、稔が戻って来るという事は、この夢のような生活の終焉を意味している。
稔が戻ってくれば、志恵さんはきっと諸手(もろて)を挙げて喜ぶだろう。
彼女の笑顔があたしだけの物じゃなくなる。
そして――。
がちゃり。
鍵が開いた。
この部屋も、あたしだけの物じゃなくなる。
ドアが開かれた。
それは――。
きいい。
嫌だ。
何者かが部屋に足を踏み入れる。
「み、稔？」
あたしは開いたドアの向こうに立つ人影に眼の焦点を合わせた。
「うわっ！」
影が声を上げ、踏み入れた足を引っ込めた。
男の人の声だった。太く低い大人の男の声。
違う。
稔ではない。
でも、聞き覚えのある声。
「相馬先生？」
影の正体は、社会科教師の相馬一臣だった。

「君は――田島さんじゃないか」
　相馬先生は目を剥くほど驚いていた。普段ではめったに見られない顔だ。
「あの、あたし、志恵さんからこの部屋の鍵を借りて――」
　あたしはしどろもどろになりながらも事情を説明しようとした。
　以前だったら相馬先生に声を掛けるなんて、妄想する事はあっても実現するなんて思った事もなかった。この一ヶ月、稔の調査をしながら色々な人と話をした経験の賜物(たまもの)である。
「――そうか。志恵さんに会ったのか」
　相馬先生は納得してくれたようだった。
「もしかして、相馬先生もこの部屋を使っていたんですか？」
「ああ、そうだよ」
　相馬先生が志恵さんの知り合いだったのか。
　この部屋の本当の主人。
　多量のカセットテープの持ち主。
　それが、相馬先生だったなんて。
　脳が情報を上手く繋げられない。
　この部屋を作ったのが相馬先生。
　相馬先生が使わなくなり、次は稔。
　稔が倒れ、あたしが使う事になった。
　――待てよ。
　この部屋の本当の主が相馬先生なのだとしたら、日記に書かれていた稔が会う約束をしていた人物というのは――。
「葉摘！　その男は危険だ！」
　机上から叫び声が上がった。袋から這い出た槐だった。
「ん？　今のは何だ」
　相馬先生が怪訝そうに部屋の奥を覗き込んだ。薄暗くて見えないのか、部屋に入ろうともう一度足を踏み入れた。
　やばい。あの珍奇な虫っころが見つかったら大変だ。
「いや何でもないんです」
　相馬先生は止めようとするあたしを押し退け、強引に部屋に入った。
「先生、ちょっと待って下さい」
　あたしは思わず両手を伸ばし、相馬先生の右腕を掴んだ。すると、
「ううっ――」
　途端に相馬先生は苦しみ出し、その場に膝を着いてしまった。
「す、すいません」
　あたしは慌てて先生の右腕から手を離した。そんなに強く掴んだつもりはなかった。
「だ、大丈夫ですか？」
　あたしは右腕を抑えてうずくまる相馬先生を覗き込んだ。
　――そして、あたしは言葉を失った。
　先生の右腕の先が――掌が白く光っていた。
　光る掌の表面に、丸い何かが浮き彫りになっていく。
　それは、虫のような形をしていた。
「葉摘、逃げるぞ！」
　槐が再び叫ぶ。
　翅を広げて羽ばたき、あたしの所まで飛んで来た。
「そいつは――」
　言いながらあたしの袖を強く引っ張る槐。凄い力で、あたしは部屋の外へと引き摺り出された。
「――採集者(ハンター)だ！」
　何が何だか解らないまま。

あたしは全力で駆け出していた。

９．インヴィテイション

九．インヴィテイション

気が付くと、神社の境内に隣接する大きな公園に入っていた。

すり鉢状の地形をしている公園で、底の部分に池がある。見晴らしが良くどこに居ても見つかってしまいそうだったので、あたしと槐は人気のなさそうな林に身を隠した。

「おうええぇ」

近年まれに見る暑気と急な運動のダブルパンチで、今にも吐きそうである。

いくら体質改善したといっても、これはキツい。

あたしは近くの木に背をもたれかけた。ずるずると滑り落ち、地面に尻を着いた。

全ての方向から虫の鳴き声が聴こえてくる。うるさくて仕方がない。

槐があたしの肩に止まった。

「いきなり走らせてしまって済まなかったな、葉摘」

「はあはあ――ちょ、ちょっと槐。一体どういう事なのよ？」

息も絶え絶えになりながらあたしは訊ねた。

「前に話した事があるだろう？　あれがワタシ達導き手(リーダー)の忌むべき敵。夢の狩人(かりうど)――採集者(ハンター)だ。この現実世界と夢の世界を自由に行き来するワタシ達を狩る者なのだ」

はっきりとは覚えていないが、そんな話を聞いたような気はした。

「採集者(ハンター)って、相馬先生が？」

「ああそうだ。以前、ワタシは彼に殺されかけた事がある。葉摘と会う直前だ」

「嘘よ。相馬先生がそんな――」

そんな事するはずがない。相馬先生は社会科の教師として頑張っているじゃないか。くだらない大人ばかりの世界で、尊敬できる数少ない大人だ。そんな立派な先生が、そんな採集者(ハンター)なんてモノのはずない。

「証拠ならば葉摘も見ただろう。彼女を――あれの右手から現れたワタシの同属の躯体(カラダ)を」

そうだ。あたしは見た。

相馬先生の右手が白く光り出し、掌の肉が丸い虫のような形に盛り上がっていた。あれが槐の仲間だと言うのか。

「ど、どうして相馬先生の手から槐の仲間が出てくるのよ？」

「どうして――だと？　理由や原因など詮索するだけ無為だ。結果だけ、今のこの状況だけをしっかり認識したまえ」

槐の言う通りなのかも知れない。

まず、このわけの解らん状況を切り抜けなければ、どうしてもクソもないのだ。

「それに――あれはワタシの仲間ではない」

「はいはい。仲間じゃなくて同属だ、って言いたいんでしょ。こんな時に細かい事言わないでよ」

「違う。そうではないのだ」

「じゃあ何が言いたいのよ？」

「あれはただの躯体(カラダ)だ。彼女の残骸でしかない」

ああそうか。あたしは得心した。

槐のような夢の世界の存在にとって、体は仮初のものに過ぎないと言いたいのか。

――彼女って、角がないから女だってのか。

「じゃあその彼女の中身――って言うか、本体かな？　どっちでもいいわ。それはどこに行っちゃったって言うのよ？」

「おそらく消滅してしまったのだろう」

「死んじゃったって事？」

「おそらくはな。採集者(ハンター)は彼女を殺した後、残った躯体(カラダ)を取り込んで力を奪ったのだろう」

淡々と、分析でもするかのように喋った。

相馬先生が彼女を殺して躯体(カラダ)を奪った。

――本当に、そうなのだろうか。

　今一つ納得できないところがある。
「ねえ槐。あの人はあたしの先生なの。本当に採集者(ハンター)なのかもしれないけど、あたしの知っている人なの。だから、話せば解ってくれると思うんだけど」
「採集者(ハンター)と話すだって？　バカな。対話などできるわけがない。ワタシが一方的に狩られるだけだ」
「だけど、もしかしたら」
「もしかしたら、解り合えるかもしれないとでも言いたいのか？　愚かな」
「でも――」
「採集者(ハンター)は自分に危害は加えないとでも思っているのか？　それは大きな思い違いだ。他人事ではないのだぞ。捕まったら最後だ。ワタシだけではない。必ず葉摘も殺される。必ずだ」
「ま、まさかそんな」
「彼は現実世界でワタシを認識した全ての人間存在を抹消するだろう。現に今までそうして来たのだ。彼と遭った者は、誰一人として生き残っていない」
　相馬先生が、あたしを殺すだって？
　そんなバカな話があってたまるか。
「じゃあどうするって言うのよ。あたしも一緒に逃げろっての？　どこまで逃げればいいのよ。地の果てまで？　それともあなたの世界に行けばいいの？」
「――そうか、夢の世界。それしかないか」
　槐は何かを閃いたようだ。
「それって、何よ？」
「もう少し時間が欲しかったが、仕方ない。葉摘に協力してもらいたい事がある」
「何急にかしこまってんのよ。協力ったってあたしは何もできないわよ。無力よ無力」
「それは十分理解している。まずワタシが葉摘に力を与えるから、その力を現状打破のために使って欲しいのだ」
「力を与えるって、どうやって？」
「それは――」
　槐が説明を始めようとしたその時――。
　あれだけやかましかった虫の音が一斉に止んだ。
　あまりにも突然で、時間が止まったかのような錯覚に陥った。
「な……ちょっと、どうなってんのよ」
「追い着かれたか」
　無音となった林の外側から、聴こえてくる音があった。
　とても静かな音色が木々の合間を縫ってあたしの耳に届く。
　クラシックのようだったが、聴いた事のない曲だった。
　奇麗な曲だが、奇妙な旋律だった。
　これは、何の楽器だろうか。
　管楽器のように思える。
　フルートだろうか。
　その音色を掻き乱すように、何かが近付いてくるのが感じ取れた。
　ざ。
　ざざ。
　ざざざ。
「な、何よこれ」
　近付いてくる。
　ざざざざざ。
　歩いているのではない。
　ざざざざざざざざざ。
　飛んでいるのでもない。

ざざざざざざざざざざざ。
これは、擦っている音だ。
ざざざざざざざざざざざざざ。
地面を――這い擦っている音だ。
見渡すと、四方八方の草叢(くさむら)が揺れている。
ざざざざざざざざざざざざざざざざ。
揺れが、徐々に近付いてくる。
ざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざざ。
その中心に居るのは――。
あたしだ。
「来るぞッ！」
槐が叫ぶと共に、草叢の中から無数の影が飛び出した。
「きゃあっ」
あたしは身構えた。
――が、影はすぐにあたしと槐に襲い掛かろうとはしなかった。
奇妙な音色に合わせ、ざわざわと蠢きながらあたし達を取り囲む。
周囲だけでなく、頭上も塞がれた。
まるで夜になったかのようであった。
警戒しつつ、あたしは影を観察した。
一つ一つは小さいが、数がとにかく多い。
「何なのよ、これ――」
あたしがそう呟くと、左肩の槐が体に力を入れるのが判った。
槐の眼が赤く光り、取り囲む黒い壁に衝撃が走った。
壁の表面が剥がれ、欠片(かけら)がぽろぽろとあたしの足元に落ちてくる。
落ちた欠片は、何かの塊(かたまり)だった。
塊を形作っているものは、見覚えのある形をしていた。
「――セミ？」
細かい種類は知らないが、セミである。
ピクリとも動かない。
「ワタシが殺したのではない。それは元から死骸だ」
槐が言う。
落ちているのはセミだけではなかった。
カナブンやコガネムシなど、様々な虫の死骸が混在していた。
「どうやら、彼女は死骸を操るようだ」
フルートのような音色。
虫の死骸。
白い虫。
目に見える事象と原田から聞いた十年前の都市伝説が、あたしの脳内で目まぐるしく結び付いていく。
やはり、相馬先生が採集者(ハンター)なのだろうか。
静かに、夜に切れ目が入った。
小さな切れ目は徐々に広がり、人間一人が通れる大きさになった。
「――逃がさんぞ」
切れ目の向こうに現れた相馬先生が、黒い渦の中に入ってきた。相馬先生が通るや否や、渦の切れ目は塞がった。
右手から白い光を放つ先生は、まるで闇を裂いて現れた勇者のように見えた。
相馬先生が勇者なら、あたしは何なのだろうか。
救われるお姫様――と言いたいところだが、こうなったら贅沢は言わない。農民だろうが奴隷だろうが救ってもらえ

るなら何でも良い。
　しかし、もし救われる側ではなく、退治される側だったら――。
　殺される――必ず。
　どうかしてしまいそうなくらい、あたしの頭は追い詰められた。
「さて、虫よ。手詰まりだな」
　先生の口の端が吊り上がる。
　初めて見た相馬先生の笑顔。
　何て、禍々(まがまが)しい笑顔なのだろうか。
　相馬先生の呼び掛けに、槐は何の反応も見せなかった。
「もう観念したのか？　今までの虫はもうちょっと足掻(あが)いたもんだがな」
　その言葉を聞いた槐が身じろぎ、
「今まで、何体の導き手(リーダー)を狩ったのだ？」
　と問い掛けた。
「十年で三体だ。しかし、お前ほどの大物はいないな」
　お前と呼ばれ、槐の全身が震えた。
「その――貴様が吸収した体の持ち主がいるではないか」
「閏(じゅん)の事か？　こいつは俺が狩ったんじゃない。俺は、こいつの力を借りているだけだ」
「ふざけるな。誇り高き導き手(リーダー)が採集者(ハンター)などに力を貸すわけがない。貴様が卑怯な手段で絡め取ったのだろう」
「自分に都合の良い事しか認めようとしないか。さすがは夢の世界の生き物だな。閏よ、どう思う？」
　相馬先生が問い掛けると、右手が放つ白い光が強まる。
「そうだな。与えてもらった役目をこなすだけで満足するような虫風情に、君の考えている事なんて解りはしない。何せ君は、作られた命であるにも関わらず、進む道を自ら切り拓いたのだから」
　右手がよりいっそう輝き、黒い渦を白く染め上げる。
「解ったろう葉摘。君の知っている彼は、仮初の心が着込んでいた服のようなものだったのだ。あれが彼の本性――採集者(ハンター)だ」
　槐が歯噛みするように言う。
「勝手な事ばかりぬかすな、虫め。田島さん、君はまだこちら側に居るな。僕には解る。僕の言う事をよく聞くんだ。その虫は君を騙そうとしている。弱っている今の内にそいつを捕まえて僕の所に連れて来るんだ。後は僕が処理するから」
　相馬先生が、あたしに左手を差し出した。
「違うぞ。彼こそ葉摘を騙そうとしているのだ。彼の言う通りにしても、元の生活には戻れない。すぐに殺される。いや、死ぬより辛い目に遭わされるかもしれない。――葉摘、ワタシに力を貸してくれ。そうすれば、あの時間を取り戻せるのだぞ」
「あの――時間？」
「そうだ。あの部屋で得たかけがえのない夢の時間だ」
　槐の言葉があたしの中に染み込んでくる。
「部屋――夢の――」
「葉摘、夢の時間を共に歩もう。永遠の、永劫の時間を」
　優しく、甘く、染み渡る。
「ええ、戻りましょう。あの――」
　あの部屋に――。
「解った」
　槐はそう言うと翅を広げ、空気を震わせた。
　ゆっくりと飛び立ち、あたしの目の前に静止する。
　表皮と同じ瑠璃色の光が、広げた翅から放たれた。

「葉摘、左手を見たまえ」
　そう言われ、左手に何かを握っている事に気付いた。
　左手を開くと、中に小さな鍵があった。
　失くしてしまったと思っていた銀の鍵。
　あたしの――初めての宝物。
「銀の秘鍵(かぎ)を掲げたまえ。さすれば大いなる門扉は開かれ、汝(なれ)は彼(か)の地へと誘(いざな)われん」
　言われるがまま、あたしは左手の鍵を掲げると、槐の腹部に鍵穴が現れた。
　あたしはその鍵穴に銀の鍵を差し込み、捻った。
　かちり。
　ゆっくりと、槐の体が二つに分かれた。
　まるで門が開くようだった。
「第一の門は開かれた！」
　槐は高らかに声を上げた。
　頭部の角が黒く変色し、形状を変化させながら伸びる。
　五叉(ごまた)に分かれていた先端部のそれぞれも細く伸長し、人間の手のような形になった。
　その様子を、あたしは呆然と眺めていた。
　黒い手が、虚空を握り締める。
「いけない！　田島さん、戻って来るんだ！」
　相馬先生が叫んだ。
　その声を聞き、朦朧(もうろう)としていたあたしの意識が一瞬だけ鮮明になった。
「せ――んせい？」
　振り返ろうとするあたしの視界に瑠璃(るり)色の波が覆い被さった。
　視線を槐に戻すと、翅から溢れ出す瑠璃色の光が、天に突き出された黒い拳を中心に渦を巻いていた。
　上を向いているのに落ちていくような感覚。
　空に吸い込まれてしまうような錯覚。
　遠近感が掴めず、眩々した。
　視界が歪む。
「いざ行かん。夢の世界――幻夢郷(ドリームランド)へと！」
　あたしの体が、瑠璃に融けていく。

十．テレストリアル・ゲート

そして、あたしはたった一人で四つの世界を巡った。

まず、ただ茫漠(ぼうばく)と広がる大地の世界。

建物も木もなく、人間も動物もいない乾いた世界を、あたしはあて処(ど)もなく彷徨(さまよ)った。

あたしは心を乾かす事で、その世界を手に入れた。

次は、水の中の世界。

泳いでも泳いでも水面に達する事がない、呼吸のできない冷たい世界で、あたしは永劫の窒息を味わった。

あたしは生を諦める事で、その世界を手に入れた。

三つ目は、炎の世界。

一面が燃え盛る業火の世界で、あたしの皮膚が髪が眼が肉が肺が内臓が炭化する事なくいつまでも炙(あぶ)られ続けた。

あたしは未来を捨てる事で、その世界を手に入れた。

四つ目は、大風の世界。

目も開けていられないほどの風が吹き荒れる世界で、あたしは飛ばされないように必死で何かにしがみついた。

あたしは希望を手放す事で、その世界を手に入れた。

大地と火と水と風。

全ての物質、現象、肉体。

在るという事を理解し、この五つ目の世界に辿り着いた。

ここは、何も無い世界。

踏み締める大地も――。

潤いを与える水も――。

暗闇を照らす火も――。

木々を揺らす風も――。

何もない、ただの空間。

――空(くう)の世界。

ここが、槐の言っていた夢の世界なのだろうか。

「よく――ここまで来た」

空間に槐の声が響いた。

「槐？　どこに居るの？」

あたしが問い掛けると、空間の一部がぐにゃりと歪み、大きな壁が現れた。

石造りの壁の中央に重厚な黒い扉の門が構えていた。

「この門は何？」

「これは――窮極(きゅうきょく)の門だ」

「窮極の門？」

「そう。いや果ての空虚に至る最後の門――」

「いや果ての空虚？」

「目に見える陽界を極めた者が辿り着く、目に見えない陰界――」

「目に見えない世界？　何を言ってるのかさっぱり解らない」

――嘘だ。

あたしは槐の言葉の意味を理解している。

陽界というのは、あたしが今まで手に入れた四つの――いや、この何もない空間も入れた五つの世界の事だろう。

物質。

現象。

肉体。

　つまりは現実世界の事。
　陰の世界はおそらくその逆――夢の世界を指すのだろう。
「陰界とは識(しき)。識(し)る世界。認識している状態」
「何それ。よく解らないよ？」
「理解する事はできない。識る事と理解する事は違う。理解しているという状態は、まだ理解していないという事なのだ」
　あたしはこれ以上の論議は無駄だと悟った。
「もういいわ。それよりさ、ちょっと話が違うんじゃない？　夢の世界に連れて行ってもらえるって聞いてたんだけど」
　話が違う。干乾(ひから)びかけたり、溺れ死にかけたり、焼け死にかけたり、吹き飛ばされかけたりするなんて聞いていない。
「夢の世界に行けば、あの部屋があたしだけの物になるって言ったじゃない。あれは嘘だったの？」
「嘘ではない。陽界と陰界を越えた者こそが真理を――夢の世界の秘力を得る事ができるのだ」
「真理なんて要らない。あたしはただ、あたしだけの場所が欲しいの」
「ならば、目の前の門を開きたまえ。そこに君だけの場所がある」
　あたしは黒い門を見つめた。
　この門を通れば、あの部屋があたしだけの物になる。
　あの夢のような時間が、永遠に続く。
　あたしは門に歩み寄った。
　――でも。
　本当にそれでいいのだろうか。
　あたしがこのまま進めばどうなる。
　あの部屋があたしだけの物になる。
　そこには志恵さんも居るのだろうか。
　居たとしても、それは本物なのだろうか。
　現実世界のあの部屋が手に入るのか。
　それともあの部屋とそっくり同じ部屋が手に入るという事なのだろうか。
　後者だとしたら、簡単な話だ。
　現実世界からあたしがいなくなったというだけの事。
　その、あたしがいなくなった世界はどうなるのだろうか。
　稔の意識は戻るのだろうか。
　稔があのままで、あたしまでいなくなったら、両親はどう思うのだろうか。
　悲しむだろうか。
　悲しんでくれるのだろうか。
　父さんと母さんの気持ちを肯定的に考えた事なんてなかったな。
　折角、稔の事も解り始めていたのに。
　こうなってみて初めて考えてみる。
　世界があたしを突き放したのか。
　あたしが世界を否定したのか。
　もう少し、何が問題なのか考えてみるべきではなかったか。
　それと向き合って見るべきではなかったか。
　他人や環境のせいにしてはいなかったか。
　あたし自身の問題点はなかったか。
　努力すべき事はなかったか。
　改善できる事はなかったか。
　もっと色々考えて、たくさん行動すれば良かった。

稔の事を調べたように――。
――いや、今更の話だ。
ここまで来てしまったのだ。
今更、引き返せるはずがない。
「葉摘――葉摘――」
槐があたしを呼ぶ。
さっきまでとは違う弱々しい声。
「どうしたの？　あたしはここに居るよ」
「か――鍵を」
銀の鍵は、あたしの左手に握られている。
「もう一度、この鍵を使えばいいの？」
「そうだ――早く、早く」
苦しそうに槐は言う。
「どうしたの？　大丈夫？」
「も――問題ない。葉摘、鍵を早く――彼が、彼が来てしまう。早く――」
「彼って、相馬先生の事？」
相馬先生が来る。
閏という右手の虫の力を使えば、ここに来るのも不可能ではないのだろう。
しかし、そうまでして槐を捕らえたいのか。
そんなに深い恨みを抱いているのだろうか。
――もしも。
もしも、相馬先生があたしを助けるために向かって来ているのなら。
もしも、現実の世界に戻れるのならば。
戻っても良いかもしれない。
――でも、相馬先生が槐を捕らえるためだけに来たのならば。
あたしは――。
門を開けよう。
「は、葉摘……」
槐が消え入りそうな声で言う。
空間が歪み、白い光をまとった相馬先生が現れた。
その様子は、まるで雑巾のようだった。
服はぼろぼろに破けており、肌の至るところに擦過傷が走り、深い傷からは血が滴(したた)っている。
「田島さん。駄目だ。その門を開いちゃいけない」
相馬先生がまず発した声は、あたしへの呼び掛けだった。
嬉しい――いや、やめてくれ。
戻れるかもしれない、って思っちゃうじゃないか。
「向こうに行ったら、二度と戻れないんだぞ！　解っているのか？」
「――解ってます。あたしは、夢の世界で暮らしたいんです」
「全然解っていない！」
相馬先生が声を張り上げた。
――ああだめだ。
「夢の世界の――幻夢郷(ドリームランド)の住人になるという事は、君は君じゃなくなってしまうという事なんだぞ！」
――それはどういう意味ですか、先生。
世界が歪む。
「幻夢郷(ドリームランド)は全ての事象を受容する。あらゆる多様性を肯定するんだ。混沌とした、何でも有りの世界

。それがどういうものだか解るか？」
「わ、解りません。で、でも、全てが受け容れられるのなら良い世界なんじゃーー」
　あたしは、どうすればーー。
「全てが認められる世界なんてーーそんな世界、ロクなもんなわけねえだろう！」
　相馬先生が、哀しみと怒りの入り混じった顔であたしを見ている。
　ーーせんせい。
　助けてください。
　あたしはどうすれば良いんですか？
「甘ったれるなバカたれ！　自分の事は自分で決めろ！」
　教えて下さい。
　あたしをーー助けて。
「田島、お前はどうしたいんだ？　言ってみろ！　言葉にしてみろ！」
　あーー。
　あたしはーー。
「あたしは、もう一度ーー」
「いけない、葉摘。彼の言葉を聞いてはいけない。葉摘、早く門をーー門を開くんだ」
「黙ってろクソ虫野郎！　横から他人がピーチクパーチクロ出しできる事じゃねえんだよ！　てめェも男なら、女の言いたい事くらい自由に言わせてやれ！」
　相馬先生の怒声が、何も無い空間に響き渡る。
　あ、たしはーー。
　ぐらり。
　黒い扉と石造りの門が歪んだ。
「は、葉摘ーー頼む。ワタシをーーワタシの為に」
　あたしはーー稔や父さんや母さんと。
「田島、一つだけ言っておくぞ！」
　ーー志恵さんと相馬先生と。
「俺は、お前がどんな決断をしても褒めてやる」
　もっと、話がしたい。
　あたしの事を聞いてもらいたい。
「もし夢の世界(むこう)に行く事を選んだとしてもーー笑って送り出してやる！　ーーだから」
　ーーだから、帰って来い！
　矛盾だらけのその言葉が、あたしの迷いを断ち切った。
「帰りたい！　帰ってもう一度ーーもう一度やり直したい！」
　もっと、みんなの事を知りたいんだ。
　あたしの声が空間そのものを軋ませる。
「ハーーはツみーー」
　門の歪みが限界に達し、音も無く弾けた。
　何も無い空間に、門扉の欠片が舞う。
　きらきらと、あたしの大好きな瑠璃色の光を放ちながら。
　あたしは両手を出し、はらはらと舞い落ちる欠片を受け止めた。
　右手に持った銀の鍵が優しく光る。
　欠片は、雪が融けるようにあたしの手に吸い込まれていった。
「ごめんねーー槐」
　あたしは、槐の欠片を抱き締めた。

１１．カレイドスコープ（完）

十一．カレイドスコープ

八月二十日・土曜日・午前十一時半。

目を醒ますと、病院のベッドの中だった。

あたしの体の色々な部分から大小様々な管が伸びており、よく解らない機械と繋がっていた。

ーー何て滑稽なんだろう。

あたしは思わず笑った。

すると、ベッドの周りに居た人達が声を上げた。

医師や看護師。

母さんに父さん。

ーーそれと。

稔が立っていた。

状況が全く掴めなかった。

夢うつつなのか、薬のせいか、薄ぼんやりとした意識のまま、説明を聞いた。

今日は、八月二十日の土曜日だそうだ。

あたしは誕生日の七月十九日に倒れ、ちょうど一ヶ月の間、意識不明だったそうだ。

ーーおかしい。

意識不明だったのは稔のはずだ。

母にその事を訊ねると、母が病院からあたしに電話を掛けたすぐ後、稔の意識はあっさりと戻ったのだと教えてくれた。

稔の意識が戻って安心したすぐ後に、あたしが救急車で担ぎ込まれたと知った母は卒倒しかけたらしい。

そう言えば、病院に向かう途中に奇妙な光を見て意識が遠のいたような気がした。

今思えばーー。

あれは槐だったのだろう。

おそらく、あたしと槐が初めて会ったのは翌日の朝ではなく、その時だったのだ。

根拠は無いが、なぜか確信が持てる。

あの時、あたしは槐によって現実と夢の境目に連れて行かれたのではないか。

ーーしかし、だとするとその後のあたしの一ヶ月間は夢だったという事か。

槐があたしに幻覚を見せていたのか。

原田という刑事と知り合った事も。

稔の足跡を辿ったあの暑い日々も。

神社の境内にあるおかしな部屋も。

その部屋の鍵をくれた志恵さんも。

部屋の最初の主だった相馬先生も。

ーー全てが、夢だったというのか。

一体、何の為にそんな事をしたんだろうか。

「ーー起きたばかりで、心の整理が着いていないだろう？」

もう少し休みなさい、と父さんが言った。

「ええ、そうね」

母さんや稔、医師達は父さんに促され、病室を出て行った。

困惑しているあたしの事を思って言ってくれたのだろうか。

正直ーーありがたい。

一人で落ち着いて考えたかった。

父さんの気遣いに、あたしは心底感謝した。

これからはもう少し話をしてみよう、と思った。

父さんとも母さんとも――稔とも。
あたしは、ほんの少しだけ泣いた。
生まれて初めての、嬉し涙だった。
涙を拭うと同時に、コンコンというノック音が病室に響いた。
「どなたですか？」
上手く発声する事ができず、声が引っ繰り返った。
「睦月です。睦月志恵。入ってもいいかな？」
来訪者は、夢に出てきた人物だった。
「ど、どうぞ」
ドアが開き、奇麗な女性が入って来た。
「あ、あの――」
何を言って良いのか判らない。
あなたはあたしの夢の中に出てきた人ですか、なんて間抜けな質問をすればいいのか。
「これ、お見舞いね」
志恵さんが花の入った籠をひょいと持ち上げ、あたしに見せた。
「何て説明すればいいのかしらね」
志恵さんは籠をあたしの枕元の台に置きながら言った。
「あの一ヶ月間は――夢だったんですか？」
あたしは志恵さんに訊ねた。
「いいえ。実際にあった事よ」
志恵さんはきっぱりと答えた。
「でも、あたしはずっと意識不明だったって」
それを聞いた志恵さんは、うーんと唸って頭を傾げた。
「槐くん――だったっけ？　葉摘ちゃんの導き手(リーダー)は」
「はい」
「その子ね。あなたを助けようとしてくれたのよ」
「槐が、あたしを？」
「ええ。ま、その槐くんのせいで色々と厄介な事になっちゃったんだから、助けるも何もないんだけどね」
志恵さんは寂しそうに微笑んだ。
そもそもの発端は十年前にあるという。
十年前、この市(まち)で大きな怪奇現象が発生し、志恵さんや相馬先生はそれに深く関わったのだそうだ。詳しく教えてはくれなかったが、原田から聞いた数々の都市伝説もその怪奇現象が元で引き起こされたらしい。
そして、あたしが拾った銀の鍵も、その怪奇現象の遺留物の一つだった。あの銀の鍵は夢の世界への門を開く道具で、鍵を手にした者の許には槐のような導き手(リーダー)が現れる。
導き手(リーダー)とは、現実世界の人間を誘い混沌と同化させ、衰退して行く夢の世界を活性化させるという役割を与えられた存在なのだそうだ。
「あたしは、槐に騙されていたのですか」
と訊ねると、志恵さんは槐の言葉に嘘はないと言った。
夢の世界に行けば、そこを思うままの場所に変えられる。
誰しもが、自分だけの世界に君臨する事ができるらしい。
――しかし、徐々に自己は薄れていく。
夢の世界と自分の境界が曖昧となり、最後には融けて混沌の一部となってしまうのだ、と志恵さんは語った。
「幸せな気分のままなら、世界と一つになるのも悪い事とは言い切れないんじゃないですか？」
あたしがそう言うと、志恵さんはゆっくり頷いた。
「そうかもしれないわね。でも、じゃあどうして葉摘ちゃんは夢の世界(あっち)に行かなかったの？」
「よく判りません」

　理由は色々と思い付いたが、全て後からこじつけたもののような気がした。
「ただ――もう少し、現実(こっち)で頑張ってみようと思って」
　それを聞き、志恵さんは優しく微笑んだ。
「槐、あたしの事恨んでますよね」
　あたしは呟いた。
　あたしは、槐を裏切ったのだ。
　選ばれなかった時の槐の気持ちを想像するだけで、胸がずしりと重くなる。
「そんな事ないわよう」
　志恵さんが、あたしの肩をぽんと叩いた。
「言ったでしょ？　あなたを助けてくれたのは槐くんだって。もし恨んでたんだったら、葉摘ちゃんここにいないわよ」
「どうしてですか？」
「だって、葉摘ちゃんを現実に戻すなんて槐くん以外できるわけないじゃない」
「え――でも、相馬先生が」
「あー無理無理。一臣(カズ)くんじゃないわよう。一臣(カズ)くんったら追い着くのに頭が一杯で、帰る事なんて考えてなかったんだもの」
「じゃあ――」
「槐くんは、消える前に最後の力で葉摘ちゃんを現実に帰してくれたのよ。一臣くんごとね。――まあ、その時に時間やら因果やら歪めちゃったせいで、あった事がなかった事に、なかった事があった事になって――」
　志恵さんは人差し指であたしが寝ているベッドを指し、
「こうなっちゃったんだけどね」
　と言って、ふふふと笑った。
　思わず、つられて笑ってしまった。
　そうなのか。槐があたしの事を。
　槐に、心の底から感謝した。
　そこでコンコン、とドアがノックされた。
「おっ。来た来た」
「来たって――誰がですか？」
「ふふふ。ミスター役立たずよん」
　志恵さんがにんまり笑いながらドアに歩み寄る。
　ドアが開くと、そこには相馬先生が立っていた。
　先生は、胸にひまわりの花束を抱えていた。
「こ、こんにちは」
　気恥ずかしいのか気まずいのか、相馬先生は部屋に入ろうとしなかった。
「いいから、早く入りなさいよ」
　志恵さんが相馬先生を小突く。
「うるさいな。解ってますよ」
　相馬先生がベッドの脇に来た。
「調子は、どう？」
　極度の緊張。たぶん、お互いに。
「あ――だいじょぶです」
　今の無愛想じゃなかったか？
　もし、あたしが怒ってるって先生が誤解したらどうしよう。
　どうしよう嫌われたらどうしよう。
　――いや。
　そんな事、考えたって無駄だ。

頑張る為に帰って来たんじゃないか。
あたしは相馬先生を見上げ、口を開いた。
「あの――」
目が合ってしまった。
――負けるもんか。
「ん？　どうした？」
聞きたい事があるんだ。
もっと話がしたいんだ。
「――右手の虫の話、聞かせてもらえませんか？」
相馬先生は一瞬だけ戸惑った後、
「いいよ」
と頷いた。
話し始めると、すぐにいつものマクラの調子になった。
あたしは何度も笑い転げた。
そして――少し泣いた。
笑いながら、右手を握った。
泣きながら、槐を想った。
とっても奇麗な瑠璃色の躯体（カラダ）。
夢の世界を映す万華鏡。
思い出すだけで――。
目が眩んだ。

テレストリアル・カレイドスコープ

http://p.booklog.jp/book/1566

著者 : sasagani
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/sasagani/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/1566

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/1566